
らき すた オレと愉快的仲間たち

ME-GA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らき すた オレと愉快的仲間たち

【Nコード】

N2472J

【作者名】

M E - G A

【あらすじ】

少年は、一人だった・・・

そんな少年、倉場かいとを救ったのは、たくさんの仲間たちだった。

こなた「かいと君は1人じゃないよ。」

かがみ「もう、そんな悲しいこと言わないでよ!!」

つかさ「かいと君は私のこといつも助けてくれた。」

みゆき「かいとさんは、いつも私たちの支えでした。」

少年は心から笑った。

かいと「みんなと・・・もっと早くに会いたかったな・・・」

それは少年のエゴだった。でもそれは誰もが願った思いだった。

よつこそ

オレの人生は、あのとき変わったんだ。あの4人とのちょっとした出会いがオレの全てをやさしく包んでくれたんだ・・・

オレに幸せをくれた仲間たちとの愉快的日常を特別に教えてやる
オレの大切なヤツらとの高校生活を・・・

埼玉県某所に位置する陵桜学園。オレはこの高等部の3年になったとき、物語は始まった。

こなた、かがみ、つかさ、みゆき、みさお、あやの、こう、やまと、
ゆたか、みなみ、ひより、パティ。

あいつらとはここで出会ったんだ・・・

そろそろ、前フリが長い気がするな。じゃあ、そろそろ始めるぜ！
！

ようこそ（後書き）

はい、初投稿。何か異論があればどしどしどうぞ、

第0話 自己紹介

ん？何だ？

へえ、自己紹介ねえ……。オレはあんまり自己紹介とか得意じゃねえんだけどな。

お前らが知りたいってんなら教えてやるぜ。
ほら、なんか見たことねえヤツがこれくれたから、オレのこと載ってるみてえだけだな。

名前：倉場 かいと（くらは かいと）

性別：男 年：17歳 身長：174cm 体重：49kg

特徴：力は強く、勉強もそこそこできるため、女子にもてるが自覚はない。

好きなもの：ハンバーグ、運動、ゲーム 嫌いなもの：人参、人付き合い

見たか？見たんなら返せ。これ以上自分のこと見られるとちょっと恥ずかしいからな。

じゃあ、そろそろ始めるぞ。

第1話 春の日の出会い

陵桜学園 高等部前グラウンド。ココは4月になると新入生たちのきやつきやというピンクな雰囲気でのまれてしまう。

かいと「今年でやっと終わりだな・・・」

思えば2年間、つまらないことばかりだった。ただ、普通に学校に来て、普通に勉強して、普通に生活した。これでやっと終わるのだ。

かいと「ああ、とりあえずクラス表、見てくるかな。」

オレのクラスは3 - B。それだけ見れば充分だ。オレはさっさとクラスに足を運んだ。

ななこ「あー、今年からみんな3年生になったわけやから、しっかり受験生としての自覚を持って生活するように！！」（ドサッ）

遅刻してきた（おそらく寝坊）であろう担任の確か黒井とか言う先生が教卓に突っ伏して動かなくなっただけで早めに朝の会は終了し、生徒たちの時間になった。

かいと（それにしても・・・）

休み時間は、うるさくてとてもじゃないがゆつくりできるものではない。少し不快な思いをしつつ、教室をあとにした。

半つわの空のまま、廊下を鼻歌（ハレハ・ユカイ）を歌いながら歩いていると、前方の女生徒が何やらテレフォンカードらしきものを落とした。おそらく気づいていないのだろう、そのまま歩いていつてしまった。

かいと「あ、これ『涼宮ハ・ヒの憂鬱』の懸賞カードだ。」

そこには、ちょっと前に募集していた本の帯に着いているアレを送って、当たるヤツ、それだった。長門がプリントされていて、貰ってしまったおうかと思ったが持ち主が分かってしまったので仕方なくさっきの女生徒を追った。

かいと「おい!!」

そう言つて、女生徒の腕をつかむとびつくりした顔でこちらを向いた。まあ驚くだろうな。

かいと「これ。さっき落としたぞ。」

そう言つて、先ほど落としたカードを渡した。

???「ああ!?!あ、ありがとう!・・・良かった」

ホントに嬉しそうだな。まあ、用は済んだしさつさと帰るかな・・・。

???「ねえ、少年。名前は?」

かいと「!？」

いきなり聞かれて、さっきと立場は逆転。オレの顔は驚いた顔になったと思う。

こなた「わたしは”こなた”。”泉こなた”。」

かいと「え!？あ・・・倉場かいと・・・。」

こなた「そう、かいと君ね!! ありがとう」

そう言っ て、泉? は待たしていた、友人たちのもとへと帰っていった。

かいと(どうせ・・・今日限りの付き合いだよなあ・・・)

そんなことを思っていると、予鈴がなったためオレは急いで教室へ戻った。

第1話 春の日の出会い（後書き）

祝！第1話！！

かいとがこなたと出会った話です。

今回は、「食で結ばれた絆」です。

かいと「オレ、家族は死んだから。もう、あんな悲しみは嫌なんだ。それが、オレが本当に繋がりを嫌がった理由かもなあ・・・」

内容は変更の可能性有り

第2話 食で結ばれた絆

かがみ「わたしは、柊かがみ”。よろしく。」

つかさ「わたしは、柊つかさ”だよ。よろしくね。”

みゆき「私は、高良みゆき”です。よろしくおねがいます。」

・・・は？

冒頭から女生徒3人に自己紹介された。Why?

こなた「やほ。倉場くん。”

朝方見た顔だな。えつと・・・この身長は・・・

かいと「確か・・・泉・・・?。”

こなた「もうっ!“泉こなた”!!!何で!?朝教えたばかりなのに!!!”

そう、"泉こなた”だ。でも、何故今話しかけてきている?

こなた「今朝の恩返しに来ました!!!”

恩返し?一体どゆことですかね?

こなた「ほらあ、カード拾ってくれたでしょ?”

かいと「ああ、あれか。でも、あれだけで恩返しって言うほどじゃあ・・・。”

こなた「まあまあ。いいから、いいから。」

何が「いいから」だ。こっちは良くねえんだけど?

かいと「じゃあ、オレンちで夕飯作ってくれ。コンビニ弁当にしよ
うと思ってたけど、お前が恩返しってんなら、頼むわ。」
こなた、かがみ、つかさ、みゆき「はい！」

あれ！？何で4人とも返事を！？

かがみ「こなたに頼まれたのよ。恩返しを『手伝って』って。」

まじか・・・

かいと「まだか？」

ココはかいと宅付近のスーパーマーケット。家に食材が無いことを
思い出し、急遽買い出しに来ることになったが・・・

かいと（やつぱ・・・コンビニで弁当買った方が早かったか？）

すでに10分が経過している。腹減ったな・・・。

あげくにそこで30分以上待たされることになり、家路に着いたの
は7時を過ぎていた。

こなた「じゃあ・・・」

つかさ「覗かないでねえ。」

オレの家なのにか？まあいいや。
暇だな・・・そう思いオレは今朝から付けっぱなしだったネットゲ
を再開すべくパソコンへ向かった。

ちょうどそのステージのボスのギルガメッシュを討伐し終えた頃に
夕食ができたらしい。タイミングいいな。（疑）
テーブルに並べられた料理は一流レストランで出てくるんじゃない
かーって思うぐらい綺麗に盛りつけられた和風定食だった。・・・
ただ気になることが一点。

かいと「何故5人前？」

かがみ「なによ、ここで食べて文句ある？」

大有りだ。ふざけんなよ。

みゆき「す、すいません。でも流石に遅くなってしまいましたし・・・」

なるほど。時計を見ればとくに夜8時を過ぎている。

つかさ「ダメ・・・かな？」

かいと「あーもう、いいよ。夕飯作ってくれたしな。それにもう夜
も遅いし。」

かがみ「そういえば、倉場くん。両親は？」

かいと「あ？もういねえよ。オレが小さい頃に交通事故で死んだぜ
？」

みゆき「じゃあ、一人暮らしってことですか？」

かいと「まあな。」

こなた「お金とかはどうしてるの？」

かいと「親戚の援助でどうにかなってる。」

つかさ「寂しくない？」

かいと「オレは、この方がいいんだよ。」

こなた「かがみ、つかさ、みゆき「???」」

かいと「さんきゅー、うまかったよ。」

つかさ「よかったあ。」

そういつて、にっこりと笑った。そんなによかったのか。

こなた「倉場くん、一人でホントにだいじょうぶ？」

かいと「オレ、家族が死んだ時から人と深く関わることはやめてる。そんなことしたらまた、父さんと母さんの時みたいに辛い思いをするのはもう嫌だからな。だからお前らもうオレに関わるのは・・・」

かがみ「何言ってるのよ!!!」

急に柊姉が叫んだ。

かがみ「もう、そんな悲しいこと言わないでよ!!!」自分はずっと一人でいたいなんて・・・!!」

かいと「柊・・・?」

かがみ「あ・・・いや・・・その・・・」

ふと急にオレの腕がだれかに捕まれた。犯人は泉だった。

こなた「じゃあ、私たちが倉場くんの友達になつてあげるよ。」

What?今の会話から何故その答えが出てくる?

かいと「だからオレはもう父さんと母さんの時みたいな事は・・・」
つかさ「じゃあ、私たちがずっと一緒にいてあげればいいんだよ。」
みゆき「ええ。私たちがお互いに助け合っていればいいんです。」

オレの手は、みんなの手に重ねられていた。

綺麗な肌、柔らかい・・・ってそんなことを考えてたらセクハラじゃねーか!!

女子共を見送つて、オレは扉を閉め近くの壁にもたれかかり、床にぺたんと座り込んだ。

かいと「ったく・・・。人とこんなに話したの何年ぶりだよ・・・。

」

オレは独り言を言つて、宙を睨んだ。

かいと（友達・・・か。）

第2話 食で結ばれた絆（後書き）

物語の下準備が整ってきました！自分でも先が楽しみになってくる
始末です。

次回、第3話「道ばたの出会い」です。

かいと「ええ！？おまつ・・・泉の従姉妹なのか！？」

こなた「もお、お友達に名字で呼ぶなんて邪道だよ！」

内容は変更の可能性有り

第3話 道ばたの出会い

かいと「・・・？」

窓の外からちゅんちゅんと雀の鳴き声が聞こえてきた。朝か・・・ベタだな。まあ、そんなことはどうでもいいが、軽く伸びをから身を起こした。

かいと「ああ、今日も学校か・・・。」

そういえば昨日は変なことばっかだったな。ま、退屈じゃあなさそうだけどな。

やはり、自覚めが良かったせいか気分がいい。これなら今から行っても充分間に合う。

そう思い、オレは家の戸締まりをし、家を出た。

そこの角を曲がれば確か近道だったな。

家から200m程の地点に近道がある。特に利用する必要はないが何となく、な。

近道を通り、程なくしてあるものを見つけた。見つけてしまった。

???「うう・・・。」

1人の女生徒が道の真ん中でうずくまっている。

見たからには助けることにした。そんなま通り過ぎると感じ悪いだろ？

かいと「大丈夫か？」

「???」え、あつ・・・その・・・お、お腹痛くなっちゃって・・・」

なるほど、腹痛か。にしても、事情を聞いたからにはやることは一つだな・・・。

オレはその女生徒をひょいと持ち上げると（お姫様だっこ【注：本人は特に気づいてません】）そのまま歩き出した。

かいと「その制服だから陵桜の生徒だよな？」

「???」はい・・・ありがとうございます・・・。」

かいと「あ、お前。名前は？」

ゆたか「えと、“小早川ゆたか”です。高等部の一年生です。」

かいと「え？高等部？」

ゆたか「はい・・・。」

そう聞くと小早川はとても悲しそうな顔をした。その手の話題はタブーか。

まあ、なんやかんやで学校に着いた。

かいと「保健室でいいのか？」

ゆたか「はい・・・。」

小早川の顔を見ればかなり顔が赤かった。相当具合悪いな。大丈夫か？

かいと「天原先生ー！」

天原「はい？」

そう言つてベッドの近くにいた先生がこちらに来る。

天原先生。どんな相手でも分け隔て無く接してくれる。いわば白衣の天使。^{エンジェル}

オレが高校に来て初めて話した人だったな。多分。

かいと「1年が朝、具合が悪くなつたらしいんすけど。」

天原「そう、ありがとう。でも、倉場くんがこんな事するなんて先生びっくりです。」

嗚呼、オレってそんな風に見えてんだ。まあいいけど。

ゆたか「あの、先輩。」

かいと「どした？」

ゆたか「あ、ありがとうございます。」

顔を赤らめてそう言う小早川は、アレだ。萌。妹バンザイ。

かいと「おつす。」

こなた「おお、かいとくん《そつち》からあいさつしてくれるなんて。」

悪いか。つーか友達って言い出したのお前だろ。

かいと「友達（？）にあいさつして悪いか？泉。」
こなた「かいとくん！もう友達と思ってるなら、名字で呼ぶのやめなよ！！！」

いやいや、友達のとに（？）付けたところを指摘しろよ。とかがみは思ったが、あえて黙っていた。

まったく、まさかこんな事になるなんて思ってたぞ。畜生。まったく・・・と言いつつ、オレは右手で頭をポリポリとかきながら言った。

かいと「おはよ、こなた、かがみ、つかさ、みゆき」。

へえ、名前で呼ぶのも悪くないな。

第3話 道ばたの出会い（後書き）

ゆたかと出会い、みんなと距離が縮まった話。『かいとくんって流されやすいな！』と自分でも思った。

次回、第4話「ハプニングの出会い」

かいと「何だ！？お前らは！？」

????「怪しいものではありません。ただ少し来てほしいところがあるだけっス。」

かいと「充分怪しいわ！！！」

乞うご期待！！

（以下略）

幕間 追求（前書き）

倉場かいとの詳しいプロフィールの紹介

幕間 追求

名前：倉場 かいと（くらば かいと） 性別：♂

年令：現在17歳 生年月日：4月26日 星座：牡羊座 所属：

陵桜学園高等部3年B組

趣味：ネットゲームズ徘徊 好き：ハンバーグゲーム 嫌い：人
参、人付き合い

得意科目：体育 苦手科目：数学 クラブ：無所属 委員会：無所属

特徴：とにかく恋愛関係の感情などに非常に疎い。そのために泣いた女子は数知れず。

根っからのオタクでよくこなたとネットゲをする。

勉強はまあまあできる方で毎回中の上くらいの成績。数学科

目の補習常習犯。

第4話 ハプニングの出会い

かいと「いやあ！買った買ったあ！」

本日は日曜日。オレが唯一休める日。なんやかんやで今週はこなた達に振り回されっぱなしで疲れたからな。

今日はオレの趣味の一つ、ゲマズ徘徊を楽しんでいた。

かいと「何で説明口調なんだ？」

自分でも謎でした。まあ、自分の目的も果たせたのでそろそろ帰路をたどる（？）ことに。

???「そのアナタ・・・。」

かいと（なんだ？コイツら・・・。）

そこにはフードを目深にかぶっている人物が2名。

???「まあまあ、私たちは決して怪しいものではないっス・・・。」

かいと「充分怪しいだろ！！！」

オレのツツコミ我慢ゲージが限界を迎えた。

気づけば怪しい人物2名に思いきりツツこんでいた。

そんなこんなでいきなりそいつらが襲いかかってきた！！

怪しい人物Aは飛びかかってきた！

かいとのカウンター！会心の一撃！！怪しい人物Aに64のダメージ！

じゃなくて！！なんでドラ。エ！？あー そっぴや？はなかなかの大作だった・・・って違う違う！

まあ、気づけばオレは怪しい人物Aに会心の一撃ぐらいはありそうなパンチをかましていた。

ふっ、オレの自己防衛本能がはたらいたようだ・・・忘れる。

???「きゃっ！！」

???「いつ！！」

????????????????????????????????
????????????????????????????????

女？

そう、確かに女。

1人は眼鏡をかけたオレよりちょっと年下くらいの少女で、
もう1人は少々小麦色の肌のオレとそんなに変わらなさそうなくらいの少女だった。

かいと「え・・・？」

きらりん！とその二人の少女の瞳が光った・・・ように見えた。

???「?????」スキありいいいい！！」

気づけばオレは二人の肘打ちを脳天にくらい、地に伏した。

- - - - - 間 - - - - -

かいと「モデル？」

???「そうっす。」

こう「あ。私は陵桜学園高等部2年の“八坂こう”です。んでこっちが・・・。」

ひより「私は“田村ひより”っす。」

なるほど、八坂に田村か。いや今聞きたいのは名前じゃねえし。

ひより「実は私、今マンガのネタの困ってましてそこにアナタという人が現れたんですっ！！！」

こう「是非、お願いしますよ。さっきの殴ったお詫びだと思って。」

お前らも殴ったじゃねーか。オレのこと。

こう「まあまあ、いいからいいから。」

『いいから』じゃねーよ。こっちは全然よくねえ・・・ってこのネタ前もやったぞ。

???「その人も嫌がってるんだし、放してあげたらどう？」

すると、オレのちょうど後ろの方から声が聞こえてきた。

そこには、髪をポニーテールに結っている、こなたよりちょっと大きいくらいの身長の子がいた。

こう「先輩、こっちは私の親友の・・・。」

やまと「“永森やまと”です。よろしく願います。」

ひより「永森先輩は聖フィオリナ女学院に通ってるんす。」

へえ、あのエリート高に・・・ってだんだん話それてきてるぞ。本題だ、本題。

ひより「実は今度の夏コミに出すマンガのモデルをしてほしいッス！」

かいと「よしっ！断るっ！！」

こう「早っ！！」

やまと「普通の反応じゃないかしら・・・。」

かいと「そこまで言うなら、そのマンガの流れを教えろ！そこから決める！」

『ああ、気になるんだ・・・。』と、こうとやまとは思ったが口には出さないでおいた。

ひより「ええとですね・・・、

・・・という感じッスー！」

かいと「へえ……。 (テンション←)」
ひより「んで、今さっそく書いてみたイメージのキャラなんスけど・
・・ジャジャーン!!!」

そう言っで出されたノートには、でかかとオレ(?)と永森(?)
とおぼしき人物がでかかとでかかと描かれていた。
何で2回言っのカナ? 何で2回言っのカナ?

かいと「プライバシーの問題どこ行った - - - - -!!!」

永森に至っでは口をパクパクさせ、ひどく赤面している。

そう、何故ならオレ(?)と永森(?)がその・・・アレだ・・・
恥ずかしいことをしている絵だったからだ。

それにココは公衆の面前。少なからず通行人の目に入る。目に入っ
たであろう通行人達は永森と同じように口をパクパクさせ、そして
絵とオレと永森を順々に見回している。

かいと「ふざけんなああああああ!!!」

オレはそう言っで猛ダッシュで帰宅した。

その後、夏コミで当然のようにそれが売られるようになるが、それ
はまた別のお話。

第4話 ハプニングの出会い（後書き）

はい、今回は少々長くなりました。個人的にはやまとは好きなのでそれかもしれない。現にかいとくんとイケナイことをする感じになりそう・・・？

次回、第5話「たくさんの出会い」

みなみ「岩崎みなみ」です。この前はゆたかを助けてくれてありがとうございます。」

パティ「パトリシア＝マーティン」です！ヨロシクですヨー！」

みさお「柊と仲いいんだってな」。私は「日下部みさお」。よろしくな。」

あやの「柊ちゃんと同じクラスの“峰岸あやの”です。よろしくね。」

ちよつと、急ぎすぎな気がします。乞うご期待！！

（略）

第5話　たくさんの出会い

???「あ、あの・・・。」

かいと「んあ？」

オレは現在購買の帰りだ。何故かって？弁当作るの忘れてたんだよ。悪いが。

んで、今声をかけられた。

ゆたか「小早川です。倉場先輩・・・ですよネ？」

かいと「ああ！小早川か。どうした？」

ゆたか「実は、友達がどうしてもお礼をしたいそうで・・・。お姉ちゃんに聞いたら同じクラスだって聞いたので。」

お姉ちゃん？ウチのクラスに小早川っていたか？

かいと「俺のクラスに小早川はいねえけど？」

ゆたか「えと、正確には従姉妹なんです。泉っていう人なんですけど、知ってますか？」

泉？あれ、よく分かんなかったんだけど？

かいと「泉って、あいつか？泉こなた。」

ゆたか「はい！こなたお姉ちゃんです。」

まじかよ。まさかコイツとあいつが従姉妹なんてな。まあ置いといて。

オレはさっきからオレと小早川が話してるのを黙ってみてる長身の少女達が異常に気になった。

かいと「後ろのヤツら、ほっときっぱなしだけじゃないのか？」
ゆたか「はう！？」

忘れてたのか・・・案外酷いヤツだな、顔に似合わず。
すると、ショートヘアで緑がかった髪の少女が前に出た。

みなみ「“岩崎みなみ”です。この前はゆたかを助けてくれてありがとうございます。」

パティ「ワタシは“パトリシア”マーティン”デス！『パティ』でいいデスよ？ゆたかをタスケテくれて、サンキューデス！！」
かいと「はあ・・・。」

なんかよく分からんけど、いきなり自己紹介された。ああ、あのパターンか。

ゆたか「先輩はこれからどこに行くんですか？」

かいと「まあ、購買の帰りだし教室に戻るけどな。」

パティ「なら、ウタシたちハこれでモドリマスヨ！！」
かいと「ああ・・・。」

テンション高いなー、パトリシア。そう思いつつ、ヤツらと別れ教室に戻った。

???「おつす、新人！」

???「はじめまして。」

また出た！何で今日に限ってこんなに初めて会うヤツが多いんだよ！

みさお「わたしは“日下部みさお”！！よろしくなー。」

あやの「わたしは“峰岸あやの”です。よろしくね。」

かいと「あ、はい。」

じゃなくて！！くそ、このタイミング狙ってたんじゃないだろーな？

黒井「おおー、まさしくハーレム状態やないか。なあ、倉場？」

かいと「ぎゃあー！」

とつさに後ろを向き臨戦態勢。しかしそこにいたのは、担任の黒井ななこ先生。

と、確かかがみのとこの担任の桜庭ひかる先生だ。くそ、全然気配を感じなかった。

桜庭「お前的にはどいつが好みなんだ？倉場。」

かいと「何をいきなり・・・って！何聞いてくれてんだあ！」

今日は一番疲れるな、一人で全員にツツコミ入れてるからな。ちよ、かがみ。お前ツツコミ要員だろ。少し手伝って・・・ってメシ食べてんなー！

かなり、めんどくさそうな毎日になりそうだなあ、おい・・・。

第5話 たくさんの出会い（後書き）

ほい、かなり大勢でできました。かいとくんも大変ですね。

次回、第6話「主役交代!？」です！

????「もし、俺がお前に勝ったら主役の座は俺に譲って貰う!?!」
かいと「別にいいぞ?」

かがみ「早!!」

ついにかいとも主役の座を降りてしまうのか!?

乞うご期待!!

第6話 主役交代！？

武道館。今は体育の時間で男子は柔道、女子は跳び箱をやっている。それで、まあ一緒に建物でやっているわけだから当然お互いの練習が見えているわけで。

かいと「ほっ。」

男子生徒「ぐわっ！」

オレが背負い投げをし、相手の男子生徒を投げつけると女子の方から歓声が巻き起こる。

かいと（うるせえー。）

とか思いつつも、とりあえず組み手を再開。女子の方からは、

女子生徒「もつかいやってー！！」とか「倉場君かっこいいー！！」とか何とか聞こえてきてその度に体育教師が「練習しろ！」とか怒鳴っている。哀れ体育教師。

まあ、そんなこんなで自由に相手を選んで組み手をする時間になりオレは特にしたいヤツもないからな。はじっこの方でゆっくりくつろいでいた。

体育教師「倉場！！呼んでるぞ！！」

いい感じに寝れそうだったのによ。誰だよ呼び出したヤツ。

白石「俺は白石みのる！！倉場かいと！！お前に決闘を申し込む！！」

あゝ名前に“○○○”が着いてない。とか思っているのもお構いなしに白石？は続ける。

白石「俺がお前に勝つたら主役の座を俺に譲って貰おう！！」
かいと「いいよ。別に。」
かがみ「早！！！！」

向こうから見てたかがみが叫んだ。練習しろよ、かがみ。

体育教師「いざ、勝負！！」

白石「うおりゃああああああ！！！！」

オレは突っ込んでくる白石？を横によけてかわし、そのままやつの襟と左の袖をつかみ、背負い投げをする。
すると女子の方からは、

女子生徒「もっかいやってー！！」とか「倉場君かっこいいー！！」とか何とか聞こえてきてその度に体育教師が「練習しろ！」とか怒鳴っている。哀れ体育教師。ってまたこれか。

白石「くっ・・・俺の負けだ。だがまだ完全に終わったわけではない！！いずれお前にリベンジを申し込んでやる！！・・・あと俺の名前のところ、『白石』になってきてるんですけど！！」

つかさ「かいとくん、強いね。」

かいと「そんなことねえよ。相手が弱かったただけだ。」

こなた「うわ、ひどっ!!」

弱いものは仕方がない。

みゆき「それにしてもかいとさんは何でもできるんですね。うらやましいです。」

かがみ「ホント、すごいわよね。」

なんかこう褒められてはっかだと照れるな。
なんか段々コイツらに馴染んできたな。

第6話 主役交代！？（後書き）

はい、というような結果になりました。前回の次回予告見てドキドキした人、すいません。かいとくんはまだまだ主人公です！

次回、第7話は「夢魔^{リリン}の誘い」です。

かいと「寝てちゃダメだ！寝てちゃダメだ！寝てちゃダメだ！寝てちゃダメだ！寝てちゃダメだ！寝てちゃダメだ！寝てちゃダメだ！寝てちゃダメだ！寝てちゃダメだ！」

乞うご期待！！

第7話 夢魔（リリン）の誘い

（緊張感のあるBGM）
実　力　テ　ス　ト　襲　来

！　　！

黒井「ちゅーわけで、もうすぐ実力テストがあるわけやけど、みんなしっかり勉強してテストに備えるよーに！！」

こなた「先生は学生の頃どうしましたか？」

黒井「行き詰まったときは大抵趣味に走ったわ。でも、立場上厳しく行くで！」

かいと「理不尽だ！！」

かがみ「もうすぐ実力テストね。」

こなた「今年はおとーさんとの賭けてるから頑張るよー！！」

みゆき「普段から頑張るのが一番なんですけどね。」

つかさ「うう、また補修だったら嫌だな。」

かいと「まあ、実際勉強するのが当たり前だと思うぞ？」

こなた「うっ…。た、確かに…。」

かいと「まあ、オレは去年までテストなんてあつて無きような物だったから、勉強なんて全然やってなかったけどな！！」

かがみ「全然ダメじゃん！！！！」

ガスツツツ！！！！！！

かいと「ん、おっ！！！！！！」

つゝゝゝ！！んが！寝てた！！くそ。昼の夢みてたな。
現在、夜0：00。作戦開始時刻だな。テスト勉強作戦、開始！！
オレは二子山でヤマを張るか。

カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリ
リカリカリ

夜2：00。くそっ！今回の使徒はかなり手強い！綾波も何回盾で
防いでくれてると思ってるんだ。
いい加減こつちの内蔵電源も切れかけてるぞ。
ヤバイ。眠気で思考回路がおかしくなってきた。

カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリ
リカリカリ

かいと「うつ……………」。

そろそろ内蔵電源も一分切った…。

ブーツ、ブーツ、ブーツ。　　オレが2:30にセットしたケータイのバイブが鳴った。

かいと「うあああああああああ!!!」

オレはいちもくさんにベッドに駆け込み、布団をかぶった。

テスト終了、翌日。

かがみ「おーす。テストの結果出てたわよ。」

こなた「みゆきさんは2位か。相変わらずスゴいな。」

みゆき「いえ、そんなことは。」

かいと「そう遠慮することじゃねえよ。スゴイじゃねえか。」

つかさ「あ、お姉ちゃんは54位だ。お姉ちゃんもスゴいね。」

「
かがみ「うん。まあまあね。」

かいと「オレは79位か。まあまあ良い方だな。」

こなた「わたしは96位だ。これで新しいゲーム買って貰えるよ。」

かいと「えと、つかさは……?」

つかさ「395位……。」

つまり（イコール）補修………?

黒井「おお、倉場。」

かいと「んあ、先生。」

黒井「お前、毎年数学の補習受け取ったらしいけど今年は違うみたいやで！良かったな。」

そう言つてスタスタと行つてしまった。『スタスタ』つて『すたすた』みたいでおもしろいよね。

なるほど。そういえば毎年数学だけは補修を受けていたのに今年は違う。これも勉強したお陰だな。

第7話 夢魔（リリン）の誘い（後書き）

というわけでちょっと早足ですが実力テストの話です。今回はエヴァのネタが数多く使われていましたが分かる人は探してください。

次回、第8話「架空世界にて」

こなた「じゃじゃーん！！これぞ新作^{ラッキースターユニバース}LSU！！というわけでみんなでプレイしよう。」

かいと「そして何故かみんなの手元にこれ（LSU）があるわけだ。」

乞うご期待！！

第8話 架空世界にて（前書き）

ここはウルブル草原。ココに現れる黒い影。
今、ココから物語は始まる。

第8話 架空世界にて

かいと「へえ、さすが今流行のネットゲだな。
こなた「デシヨ？やっぱいいよネ。LSU!!」
ラッキースターユニバース

そう、ここは今流行のネットゲの中。まあ、もちろんオレたちがこの中に入ってる訳じゃなくて普通にプレイしてるだけだな。

先日、こなたが実力テストで良い点数をとってねだった物らしい。人数分買ったのか、こなた父。

ちなみに職業は

オレ・・・パラディン こなた・・・シーフ かがみ・

・魔導師

つかさ・・・神官 みゆき・・・ナイト ゆたか・・・

ヒーラー

みなみ・・・レンジャー

といった感じである。しかし困ったことに他のネットゲ慣れをしていないヤツらがそれぞれ別々の街を選択してしまつて、現在合流はとても難しい状態に陥っている。

こなた「とりあえず、みんなと連絡取り合つて合流するしかないね。」

かいと「お。今みゆきが一番近くにいらしいぞ。ココから東の方の街だ。」

こなた「ゆーちゃんとみなみちゃん、ミルト村で合流したみたい。」

かいと「かがみもみゆきと合流したらしい。」

こなた「つかさは・・・キルリス洞窟・・・？」

途端にオレたちの血の気は引いていた。

キルリス洞窟。推定Lv・45 モンスターLv・40。

何でもつかさは右も左も分からず、いつの間にかそこにたどり着いていたらしい。

こなた「と、とりあえずみんなと合流してから考えよう!!」

かいと「そ、そうだな!!」

オレたちは集合場所を目指し、せつせと走っていった。

かいと「つかさー!!どこだー!!」

キルリス洞窟。一端集合を果たしたオレたちはつかさ救出作戦を展開。パーティを組みココに乗り込んでいる。

しかし、オレたちのレベルは、平均8。はっきり言っていてつやられでもおかしくない状況だった。

実際、前衛で戦っているオレとみゆきは残りHPは20を切った。ヒーラーのゆたかがいて助かった。

だが、オレたちがそうして一生懸命戦っている間にこなたはしっかりとシーフの本職（宝箱の中を強奪）をしつかりまっとうしていた。

かがみ「ちよつと!あんたも手伝いなさいよ!!」

こなた「いやいや、これがシーフの本職なんだよ。」

まあ、現場は荒れに荒れていた。まず、みなみの放った矢が立ち回っているオレやみゆきに刺さったり。

かいと「ぐふう!!!!!!」

みなみ「あ……すいません、先輩。」

かがみの放った魔法がところどころに飛んでいたり。

ふと、先に敵がばったばったと倒されている空間があった。

つかさ「えい。」

つかさ以外「つかさ（さん）（先輩）！！！」

つかさが敵をどんどん倒していた。つかさ！やればできるじゃねえか！！

こなた「なるほど。つかさは神官なんだね。」

かいと「なるほど。『最後の審判』か。」

こなた「かいと以外「???」」

『最後の審判』とは。

神官が使える運試しスキルで、一定の確率で味方or敵が全滅するのだ。運が強ければ強いほどプレイヤーに有利な状況になるのだ。

みなみ「ココまで使って全滅しなかったんですか・・・？」

ゆたか「スゴイですね。」

まっただ。

こなた「とりあえず、つかさもパーティに入るんだからステータスはどんだけ・・・って、ふおおおお！な、何！？これ！？」

こ、これは・・・

LV	56	HP	1798	MP	562	力	117	防御	
276	素早さ	355	運	587					

かいと「いや！どんだけ強いんだよ！？」

かがみ「反則的じゃない！！！！」

みゆき「スゴイですね」。

こうしてつかさが入ってきた事によって大幅な戦力アップを望めたのである。

オレたちの戦いはこれから始まるのであった！！

第8話 架空世界にて（後書き）

とりあえずココまで。また改めて続きを書くかもしれない。次回もよろしく!!

次回、第9話「瞬間、心、重ねて」

こなた「来週もサービス、サービス!!」
かいと「アブないネタはやめろー!!」

第9話 瞬間 心 重ねて

こなた「今！私たちの作者はとてもヤバイ状況にあるっつ！！！」

こなたがいきなり叫んだ。周りの迷惑考えろ。

かがみ「何よ、ヤバイ状況って・・・？」

つかさ「まさか・・・病気？」

みゆき「事故でもあったんですか？」

ああ、もしかしてあのことじゃないか？まあ、誰も気づいてないようだしオレが言うしかないのか。

かいと「ネタのことか？」

こなた「そう！これは『らきすた オレと愉快的仲間たち』なんだよ！？なのにこの小説は『新世紀エヴァンゲリオン』ネタが多彩なんだよ！？これは由々しき自体だよ！」

確かに。実際今回、第9話はエヴァネタだしな。何だ？今回イスラエルでも出てくんのか？ってこういうところが危ういのかもな。

ME・GA「だって、実際角川書店の本なんてエヴァにハルヒに生徒会にスニーカーの方は東京皇帝とかしか知らないし。」

マジか。この小説の未来が危うくなってきたぞ。つかナチュラルに出てくん。作品の人气が下がる。

こなた「だから今回は作者を交えて対策会議を行いたいと思います。」

そんな感じで急遽開催された緊急対策会議。

みゆき「では、現在の現状をもとに改善策を出して頂けますか？」

みゆき「お前が仕切るのか。まあ向いてると思うけどな。」

ME・GA「次話は10記念で長編書いてみようと思うんだけど、どう思いますか？」

かいと「そういうことは聞いてねえ!!」

こなた「『灼眼の○ヤナ』ネタも盛り込んだ方が良いかな？」

かいと「新しいネタを欲してるんじゃないかって!!」

つかさ「バ、バルサミコ酢」。

かいと「つかさ!!話の筋が分からないのに発言するな!!……
ってこんなのオレ一人でさばききれねえボケの量だぞ!!異常過ぎ
るだろ!!」

ME・GA「よし、次回から初の長編に挑戦してみよう!!」

かいと「結局タイトルと内容がかみ合ってねえ!!!!」

第9話 瞬間 心 重ねて（後書き）

すいません。成り行きで書いてすいません。思いつきで書いてすいません。

ホントにすいません!!
次回もよろしく願いしますっっっっ!!!!!!!!!!

次回、初の長編。「こなた編」です。

かがみ「最近、こなたのヤツ元気無いわね。」
つかさ「そうだね。」
みゆき「何かあったんでしょうか？」

こなた編 1・母親

こなた「はぁ・・・。」

な、こなたがため息ついているとこなんて初めて見た。

かがみ「どーしたのよ。ため息なんてついて、珍しいわね。」
つかさ「何か悩みでもあるの？」

こなた「いやいや、かがみの体重ほど深刻じゃないよ？」
かがみ「なにい!!！」

みゆき「何か、いつもの泉さんと違いますね。」
かいと「そうだなあ。」

確かにいつもと少し違う。雰囲気かな。にしてもアイツに悩みなんてものがあつたのが驚きだ。

つかさ「ど、どんだけ。」
みゆき「泉さんでも悩みぐらいはあると思います。」

どーだかな。実際、単に深夜アニメでも見逃したんだろ。録画がずれたりとか。

かがみ「それはありそうね。」

まあ、アイツの悩みつつたらそんぐらいしか思いつかねえけど。アニメかゲームかマンガくらい？

放課後・・・

こなた「ちよつと今日は一人で帰るね。」
かがみ「え!？」

まじかよ。朝の時点じゃあ軽く考えてたけど、こりゃあ結構深刻そうだ。反省。
まあ、軽くボケたところでオレは暇なので事情を知るためこなたをつけた。(この時点で犯罪な気がする)

かいと「墓地？」

そう。こなたが向かったのは墓場。

かいと「ココに用でもあんのか・・・？」

すると、ちよつどオレの20mくらい先にこなたがいて、うつかり見つかってしまった。

こなた「かいとくん!？」

やべ、見つかった。どういい訳すっかな・・・

かいと「オレは父さんと母さんの墓参りに来たんだよ。」
こなた「そう・・・わたしもね、お母さんの墓参りに来たんだ。」

今日、お母さんの命日らしいから。」

そうか。こなたが元気がなかったのは、母さんのこと思い出したからか。ちよつと悪い事したな。

とりあえず、オレもこなたにならつて手を合わせる。

この時、オレはこなたの横を誰かが通り過ぎていった。気がした。

こなた編 1・母親（後書き）

こなた編 初書き。今回はこなたの悩みの話。次回に続きます。

次回、「こなた編 2・星降る夜に」

かいと「よし！行くぞ こなた！！」
こなた「ええ？どこに！？」

こなた編 2 星降る夜に（前書き）

こなたに母親のことを聞いたかいと。

その夜かいはこなたを公園に呼び出すのであった。

こなた編 2・星降る夜に

こなた「かいとくん、待った？」

かいと「遅い!!!」

コイツの遅刻癖はどうやったら治るんだ。今回は10分ですんだな。

こなた「なぐに？わたしは『宇宙人です。』って言われても驚かないよ。」

かいと「そうそう……ってちがーう!!!」

オレは長。じゃねーぞ!!!これから話そうと思ったことも話さずに帰っちまおうか。

かいと「あのな……うてまあいいや。来い。」

こなた「???」

陵桜学園 屋上。

こなた「ん？こんなとこに来てどうするの?」

かいと「そろそろだ。」

こなた「???」

かいと「上、見てみるよ。」

そこには、たくさんの流星群があった。

こなた「うわあ〜。」

こなたは、目をらんらんと輝かしている。やっぱりコイツも女だな。

かいと「こなた。」

こなた「何？」

かいと「人の悩みつてのはさ、こんだけ、星の数だけあるんだぜ。」

こなた「???」

かいと「オレだって、父さんと母さんはもういねえからお前の母さんが恋しい気持ちもよく分かる。」

こなた「・・・。」

かいと「誰の悩みが大事だとかそういうにはねえと思うけど・・・。」

かいと「お前の心だっていつかはこの空みてえに曇ったり、雨降ったり、吹雪いたりもするかもしれないけどさ。・・・そんな時はオレ達に言ってくれよ。お前の心を晴れさせたりできるかもしれないからね。」

こなた「え・・・。」

かいと「オレだってお前の泣いてる顔なんて見たくねえしな。」

こなた「ちょ・・・！それって・・・。」

かいと「?」

いまいちコイツの事はわかんねえなあ。

いや、これからだ。これから分かっていけばいい。

あの夜、二人で、星を見た。

こなた編 2・星降る夜に（後書き）

短いですが、『こなた編』終了です！。久しぶりの更新ですね。

次回・第12話「祝いと迷惑」

かいと「おい！いきなり家に上がるな！！」

つかさ「かいとくん、シヨートとチヨコレートとどっちが好き？」

かいと「ああ、オレはチヨコが・・・って何が!？」

第12話 祝いと迷惑

かいと「ふわああああ・・・。」

今日も良い朝だな。いや、関係ねえけど。今日は休みだし、ゆっくりするか。

ピンポン。

かいと「んあ？」

インターフォン。休みの日に来るってことはせいぜい新聞の勧誘とか？鮮やかに追いつ返すか。

かいと「はい？」

みゆき「おはようございます。」

かいと「！？」

みさお「よっす！」

こなた「おは〜！」

パティ「グッドモーニングです！！！」

ひより「おはようッス。」

こう「こんにちはー！」

つかさ「おはよう〜。」

かがみ「おはよう。」

ゆたか「おはようございます。」

みなみ「あはようございます。先輩。」

やまと「どうも。」

オールスター？

かいと「大勢すぎるだろおおおおおおお！！」

オレの家に入るか？つーかオレの家で何をする？

こなた「今日は何の日でしょーか？」

4月26日？何も無いよなあ・・・。

こつ「先輩、自分のことにも興味ないんですか？」

自分のこと？オレについて何か・・・！！！！！！！！

かいと「誕・・・生・・・日？」

そう、このオレ、倉場かいとの誕生日。すっかり忘れてた。

確か今日で18歳になる。ハズ。いや、そういう事じゃなくてだな。

かがみ「そういうことをこなたに聞いてね。」

みゆき「お祝いに来たんです。」

かいと「はあ。」

自宅近所。準備だ何だとか言っつて、家を追い出された。オレの家なのになあ。

そんなこんなで暇をつぶしている。かれこれ1時間徘徊してる。まだか？

そんなことを思っているオレの気持ちを汲んでくれたのか携帯が鳴った。

かいと以外「ハッピーバースデー！かいとー！」「かいと」のあつつつ！！！！！」

開口一番「クラッカーやら大声やらでオレの心臓はヤバイぐらい跳ね上がった。

その後、倉場家からは夜遅くまで歓声が起こっていた。

第12話 祝いと迷惑（後書き）

ちよつとアバウトにして終わってしまいました。
かいとの誕生日でした。

次回、第13話「娯楽」

こなた「おりゃあああ!!」
かがみ「はああああ!!」
つかさ「???」
みゆき「???」
かいと「いきなり叫ぶな。」

第13話 娯楽

らき すたオンライン。

LSUの続編。LSUを元に色々のところをバージョンアップさせ、さらにLSUのデータを引き継げる等で大変な人気を博している。

かいと「はあっ！」

魔法剣士・かいとはホーリーブレイドを放ち、ゴブリンを倒した。LSU時代よりジョブが増えたらき すたオンラインでオレは魔法剣士として地道に頑張っていた。

???「やつほ、かいとくん。」

かいと「? 誰だ!？」

そこには、シーフ、巫女、巫女、魔女っ娘。キャラメイクシステムによりおそらく自分そっくりに作ったのであるうオレの見慣れた人物達がいた。

かいと「こなたにかがみにつかさにみゆきか・・・。」

こなた「やふ。」

かがみ「やほ。」

つかさ「こんにちは、かいと君。」

みゆき「こんにちは、かいとさん。」

こなたは当然で、かがみとつかさは百歩譲って分かるがみゆきが何故?

みゆき「これって結構面白いですね。」

まじかよ。みゆきまで!?

こなた「というわけで、かいと君。覚悟!!!」

これはプレイヤー同士の対戦が新要素として盛り込まれている。

こなた「うりゃあ!」

かがみ「はあっ!!」

かいと「くっっ!」

こなたの飛ばしたナイフを剣で弾き、かがみの放った魔法を防御魔法で防ぎ、反撃をする。

かいと「フレアブレイド!!」

みゆき「プロテクトウィンドウ!!」

みゆきの防御魔法がつかさを包み、オレの魔法剣を弾く。

かいと「くそ……、1対4じゃあ分が悪い……こうなったら超必殺技だ!!」

超必殺技とは一日一回使える『クラス・アビ』と同じ効果で形勢逆転を狙える。

魔法剣士の超必殺技は『フォース・マスター』。全ての属性の力を剣に宿し、相手に放つ技だ。

かいと「くらえ!『フォース・マスター』!!!!」

こなた「シーフ奥義、盗む!!」

こなたは、このタイミングを狙っていたのかさず『盗む』を繰り出してきた。

エクセレントヒット！シーフ・こなたはマジックソードを盗んだ！簡単に言つとオレの剣が盗まれた。

かいと「こんなんアリかああああ！？」

ドウン！！魔法剣士・かいとに56ダメージ、74ダメージ、36ダメージ、51ダメージ！！

魔法剣士・かいとは力尽きた・・・。

こなた「どうかい？わたしのパーティは？」

かいと「ま、負けたぜ・・・。」

つかさ「わたし、かいと君に勝っちゃったよお？」

みゆき「すみません、かいとさん。」

かがみ「どうするの？かいと君？」

負けたからには、ログアウトかパーティ加入により蘇生して貰うしかない。

これもこのゲームの特色だった。

こうしてオレはこなたパーティに加入し、再び戦線に立つ。つかこの状況、戦士系がオレしかない。

結局、この前のLSU同様、オレのHPが著しく減っていくのであった。

第13話 娯楽（後書き）

小説『らき すたオンライン』より。
LSUの続編的な感じでやりました。

次回、第14話「梅雨の季節」

こなた「わたしの親戚のゆい姉さんが結婚1周年らしいよ？」
かいと「誰だよ・・・。」

第14話 梅雨の季節

こなた「おは〜。」

かがみ「ああ、おはよう。」

つかさ「こなちゃん、おはよ〜。」

みゆき「おはようございます。」

かいと「おう、おはよう。」

コイツらと知り合ってもう2ヶ月になる。結構長い付き合いだな。にしても、6月ってのはやっぱり嫌な気分になるな。雨降ってジメジメするし、洗濯物は乾かねえし、最近は、普通に雨降っても野球中継やってるから深夜アニメ遅れるし……。

こなた「そういえば、親戚のゆい姉さんが今日で結婚1周年らしいよ?」

かいと「誰だよ……。」

かがみ「こなたの従姉妹で婦警さん。ゆたかちゃんのお姉さん。」

かがみ、分かりやすい説明サンキュー。

かいと「6月に結婚といえばジューンブライドだな。」

つかさ「そうだね〜。わたしも憧れるな〜。」

みゆき「そうですね。わたしも結婚するなら6月がいいです。」

こなた「でも、何でこんなジメジメした季節に結婚するのがいいの?」

みゆき「諸説によると6月を守護する神が出産、結婚なども司っている、というのが始まりだと言われているんですよ。」

みゆきは博識だなあ。そこまで分かりやすい説明してくれるなんて。

放課後・・・

こなた「かいと君、うちくる!？」

かいと「何事……!？」

いきなり後ろから大声出されたらビビるわ。音量押さえる。

かがみ「こなたの家でパーティするらしいのよ。」

パーティ? ああ、今朝の親戚の姉さんのお祝いか。

かいと「ああ、いいぞ。」

泉家・・・

こなた「ただいま。」

こなた以外「おじゃまします。」

ゆたか「お姉ちゃん、お帰り。」

???「おお、お友達いっぱいだねえ、こなた?」

こなた「おお、ゆい姉さん。いらっしや。」

ゆい「んう? 見ない人だねえ。わたしは“成美ゆい”だよ! 警察
なんだけどくれぐれもわたしのお世話にならないように気をつけて
ねえ?」

かいと「ああ、はい・・・倉場かいとです。」

パーティ並のハイテンションだな。たまに生気を吸い取られてる気がする。この手の人って……。

かがみ「じゃあ、成美さんの結婚1周年記念とこなたの誕生日を祝って、カンパイー!」

What? こなたの誕生日?

かいと「いつ……?」

みゆき「泉さんの誕生日は5月28日ですよ?」

まじかつつ!! 作者の姉の誕生日と同日だぞ!! なんとる偶然!

こなた「ぶー、かいと君、知らなかったの?」

かいと「スマン……。」

こなた「で? プレゼントは?」

かいと「は?」

こなた「プレゼントおくれよ。ねーえ。」

かいと「ちょ……ひつつくな!!」

????「こなたー、おかえr……。」

なんか家の奥からおっさんが出てきた。多分こなたの父親。だつてそっくりだもん。泣きボクロとか。

そつじろつ「な、な、な……。」

? 何だ? 何でみんな血相を変えてオレのそばを離れるんだ? おい。

そつじろつ「ウチの娘と何をイチヤイチャと……。」

かいと「え、ちょ……誤解……!!誤解です……!!」
そうじろつ「問答無用……!!」

かいと「ぎゃああああああああああああああああああああ
……!!」

オレの頭に空手チョップがクリティカルヒットした。

余談だが、この後、すっかり誤解は解き、こなたのプレゼントとして一日こなたと遊ぶ約束をした。

第14話 梅雨の季節（後書き）

ゆい、そうじろっの登場。そうじろっの溺愛っプリが出せていれば良かったです。

次回、第15話「これってデート？」

こなた「さあ、今日はたっぷり付き合って貰うよ？」
かいと「オレの休日は・・・？」

第15話 これってデート？

某公園前。

かいと「~~~~~っ！！遅い！！遅すぎる！！」

アイツから誘ったクセに遅刻とはどういう事だまったく・・・。

1：00に待ち合わせして1：30になってもまだ来ないとは段々腹立ってきたな。

ふと前を見るとちょんまりした身長が目に入った。アレか。

こなた「お待たせ」。

かいと「ホントに待ったぞ」。

こなた「いやあ、普通は『全然待ってない』って言うモンだよ」。

かいと「いや、今そんなこと言ってたらダメだってことはオレにも分かる」。

<こなた'S EYE>

こなた（むう）折角デート（？）に誘ったのにこの状況はダメだよね。）

こなた「ゴメン、ゴメン。じゃあ行こうか！」

かいと「へいへい」。

むふふ。じゃあ今日は計画を発動させちゃうよ？

一人笑うこなたにかいととは少し引くのであった。

< かいと ' S E Y E >

かいと「ココは・・・?」

こなた「映画館」

かいと「分かるわ!!何でココに!?!」

こなた「映画見るためだよ」

かいと「それも分かるわ!!」

こなた「いやあ・・・純粋に映画見たいな」って。

あ、そゆこと。

かいととは女心に疎いのであった。

映画終了・・・。

こなた「んん」。いいお話だったねえ。」

かいと「そうか?」

オレには理解しがたい恋愛モノだった。てっきりアニメ系だと思っ
た。

そういえば近々『涼宮ハルヒの憂鬱』が映画化するよね。

かいと「んで?これで終わりだよな?」

こなた「いやいや、『一日遊ぶ権』だよ?まだまだ。」

かいと「げえ・・・。」

オレの休日はある同級生によりぶち壊された。

第15話 これってデート？（後書き）

こなたとかいととのデート（？）書いてみた。
こなたファンの人すいません。

次回、第16話「暑いと熱いってよく間違える」

こなた「あつ〜」。」「

かいと「熱いな。」「

みゆき「暑い、ですね。」「

第16話 暑いと熱いつてよく間違える

6月も半ばを過ぎると梅雨のせいでジメジメしてきてイヤになる。

かいと「ホント、この時期になるとまだ早いと思いつつもクーラーが恋しくなるんだよなあ。」

つかさ「そうだね。」

こなた「あつ。」

かいと「ホント、熱いな。」

みゆき「暑い、ですね。」

泉家・・・

『泉家』つて『みなみけ』みたいだよな。

かいと「ああもう、こなた。クーラーつけるぞ。」

こなた「あー、うん。」

かがみ「そのたるんだ精神が来年の夏をさらに暑くしていくと思うんだけど・・・。」

そういえば最近地球温暖化とか騒がれてるな。

かいと「だがな！オレは今が幸せならそれでいいんだー！」

かがみ「いるよなー、『自分ぐらい無駄遣いしてもいいやー』つて思ってるヤツ。」

こなた「あー、幸せ。」

まあそれに・・・

かいと「オレはこの状況はホントに幸せだと思うよ。」

つかさ「そうだね。涼しくて気持ちいいよね。」

かいと「そのことじゃなくてさ、オレはこうしてみんなと楽しくいられることが幸せだと思えるよ。」

なんかみんな顔赤いな、そんなに暑いかな？

かいと「おい、どうした？」

こなた「あ、暑いねっ！！！」

かがみ「そ、そうね。暑いわね！！！」

つかさ「う、うん！暑いな。」

みゆき「そうですね、暑いですね！」

？　暑い、だと思っけどな。

第16話 暑いと熱いつてよく間違える（後書き）

ちよい短めにしました。かいと君は相変わらず鈍感ですね。

次回、「かがみ編」です。

かがみ「こなた！いい加減にしなさいよ！..」
こなた「かがみこそ！」

かがみ編 1・舞い降りた事件

かがみ「こなた！あんたいい加減にしなさいよね！！」
こなた「かがみこそ！」

教室にはいるといきなりかがみの肘が顔面を直撃した。

かいと「グハアッ！！」

しかし、かがみはそれに気づいてない。

ていうか、珍しいな。二人が喧嘩するなんて。世の中こなたとかが
みの百合とかもあるのに。

ちなみに作者はY o u T u b e - 【M A D】 らき すた 「百合
。。。編」聞きながら書いてるらしいぞ。

かいと「どうしたんだ？」

かがみ「だって、こなたが！」

こなた「だって、かがみが！」

おお、清々しいほどシンクロしてら。こんな時でも仲いいな。

状況を聞けばどうやらこなたがアニメの話題を振り、アブない内容
になりそうなところを指摘したところ、なんやかんやで口論になっ
たらしい。

結局、その日はかがみはこっちに顔は出さず日下部や峰岸と昼食をとったらしい。

放課後・・・

つかさ「か、帰ろうか？」

こなた「うん・・・。」

みゆき「・・・。」

かいと「悪い、お前ら。今日は3人で帰っててくれ。」

そういうと、オレはさっさと教室から出て行き、3年C組の教室に急いだ。

かがみめ。つかさを待たずして先に帰るとは薄情な。と、校門の前でかがみを見つけた。

かいと「かがみ！」

かがみ「・・・。何？」

うわあ。メツチャ怒ってる。

かいと「ったく。ちょっと話がある。」

かがみ編 1・舞い降りた事件（後書き）

かがみ編。第1話です。こなたと喧嘩する話ですね。次回で解決してしまいます。

次回、「かがみ編」第2話です。

かいと「かがみは、もっとありのままのかがみを見せてくれないと思う。」

かがみ「ありがとう。かいと君。」

かがみ編 2・ありのままの自分

今日は部活がないせいか、学校に残っている生徒も結構少ない。広場の中にあるベンチに腰掛け、オレは話し出した。

かいと「朝は災難だったな。」

かがみ「別に……。」

怒ってるな。けど、オレに八つ当たりは勘弁してほしい。

かいと「大体はみゆきから聞いた。」

かがみ「そう……。」

かいと「お前は、つかさが聞いてたからどうにか止めようとしたんだよね？」

かがみ「……。」

別につかさが聞いててもいいと思うけどな。

重たい……空気が……。

かいと「か、かがみはさ、いつも気を張りすぎなんだよ。」
かがみ「さっきから何？」

かがみがだいぶ不機嫌そうな顔をしたがオレは続けた。

かいと「確かにつかさはおっとりしてるし、危なっかしいしな。姉のお前がしっかりしてなきゃ、って思うのも分かんないでもないけどな。それをオレたちの前にまで出すことは無いと思うぜ？」

かがみ「別に気を張ってる訳じゃ……。。」

かいと「いいや、絶対張ってるな。」

かがみ「だから！」

かいと「かがみは自分のこと何もオレたちに言ってくれないからなオレたちだって余計に心配なんだよ。もうちょっとかがみはオレたちに『ありのままの自分』を見せてくれた方が助かるぜ？」

かがみ「っ……。な、何よ。それはかいと君だって同じじゃない。いつも何かあっても無理して普通に見せて……。。」

かいと「オレは自分のことより、かがみの方が心配だよ。」

かがみ「うっ。う。」

かいと「今日くらい、泣いたっていいと思うぜ？」

そういつとかがみはオレに抱きついてきてわんわん泣き出した。

オレはそんなががみの頭をさすってやった。かがみが泣きやむまで。

明日から、夏休み。

かがみ編 2・ありのままの自分（後書き）

かがみ編 終了！1日でかがみ編終了してしまった。内容が短かったかな？

次回、第19話「そうだ、海行こう 1日目」

こなた「そうだ、海行こう。」
かいと「京都じゃなくて？」

第19話　そつだ　海行こう　1日目

「こなた「夏だ！海だ！」

なんかこなたが叫んだ。まあ、夏に海って言うのは否定しないけど、
 つーか今は夏休み。こなたが『海に行くからウチの前に集合！』つ
 てメールよこしてきて、んで今に至る。

こなた「というわけで、今年も運転手は黒井先生とゆい姉さんに・・・」

すると、こなたがかがみにどつかれてる。なんだ？

ちなみにメンバーは、オレ、こなた、かがみ、つかさ、みゆき、ゆたか、みなみ、黒井先生、成美さんの9人。

みなみ「車が二台ありますし どう別れますか？」

とたんに オレ みなみ 黒井先生 成美さん以外の顔が青ざめた。

「あなた、ゆーちゃん、黒井先生の車に乗ろうか？」

ゆたか「うん。」

みなみ「ゆたかが行くならわたしも……。」

かいと「じゃあ、残りのオレたちは成美さんの車で行くか。」

かがみ　　つかさ　　みゆき　「！！！！！！！！」

車内
・
・
・
○

何で3人とみがくがく震えてるんだ？そんなに海が楽しみなのか。

ゆい「じゃあ、いつくよ……」

かいと「ぎゃあああああ!!!!」

コイツらが脅えてたわけが今、分かった。にしてもこの人、ホントに警察か？

なんて考えるヒマは距離が進むにつれて無くなっていった。

一方、別車……。

こなた「かがみ、つかさ、みゆきさん、かいと君。ゴメン……。」

そういつてこなたは顔の前で手を合わせた。

ななこ「相変わらず、ゆいさんの運転は凄いなあ……。」

こなた（まあ、去年は先生も凄かったけど、今年はもう大丈夫……。）

そう思ったこなたの思いを打ち砕くように車は森の中や学校のグラウンドに突っ込んでゆく。

こなた（うう。どっちもハズレだった！っていうか先生！去年行った場所ぐらい覚えておきましょうよ!!!!）

すっかり時間も過ぎた海はカップルがきゅきゅふふしながら走り回るような赤色に染まっており、海で泳ごうとする人々はとてもまばら。ていうかいない。

夕方。ちなみにオレたちの方は峠の辺りで成美さんが何やらとある車と激しいカーレースを始め、オレたちは死屍累々。合流を果たした頃にはすっかりこの状況だった。

ゆい「さて・・・。」

ななこ「旅館でも探そか？」

こなた「去年と同じだ！！！！！！！」

かいと、ゆたか、みなみ「そうなの！？」

去年とまったく同じだった。

第19話 そうだ 海行こう 1日目（後書き）

海へ。原作とうまく絡めるのが大変でした。

次回、第20話「そうだ 海行こう 2日目」

こなた「海………!!」

かがみ「いや、そんなにテンション上げるほどじゃあないっしょ……」

第20話 そうだ、海行こう 2日目

人は何故海へ潜るのか。

こなた「昔、ある人は言いました。」

かいと「それは……。」

かいと「こなた「そこに、海があるから……!!!!」」

意味もなく叫んだ。

一行は、一夜明けた今日ようやく海へ来ていた。

かいと「こなた「気になったんだがそれはスク水か？」」

こなた「そだよ。だってそういうニーズもあるじゃん？」

いや、あるが。そこが気になる訳じゃなくてオレがホントに気になるのはスク水に書かれている

『6-3 泉』と書かれたところ。

一体いつの水着だよ。と思ったが、それは何となく誰かに突っ込まれているような気がしてやめた。

かがみ「くしゅん！」

つかさ「お姉ちゃん、風邪？」

みゆき「大丈夫ですか？」

かがみ「うん、多分……。」

ゆたか「お姉ちゃん、お待ちせよ。」

みなみ「待たせてすみません……。」
かいと「ん。気にすんな。」

にしても。なんかこう……。な。ひよりが言っただけのことでも少し分かる気がする。

かいと「なかなか良いカップリングだな……。」

ゆたか「な、何が!？」

かいと「ああ、こなたとかがみもか。」

かがみ「何が!？」

まあ、こんな所までそういうのを持ち出すのは置いといて……。

こなた「じゃあ、一泳ぎしようか!」

かいと「おう!」

みゆき「私は泳げないのでこちらでゆっくりしておきます。」

つかさ「わたしも。」

ゆたか「わたしも少し落ち着いてから行きます。」

みなみ「ゆたかが残るならわたしも……。」

かがみ「子供だな……。」

いまいち不評の返答を受け取ったこなたは「え」。と微妙な顔をしていた。

かいと「じゃあ、ビーチボールならどうだ?」

かがみ「まあ、それなら。」

つかさ「それ、楽しそう。」

と、まあほぼ満場一致でビーチボールに決定し、ビーチボール開始。まあ、現場は荒れた。負ければ夏休みが開けた日、みんなに昼食を

おごるという罰ゲーム付き。

親戚の援助で生活しているオレは無駄な出費をするわけにはいかなかった。

まあ、そんなオレのがんばりも虚しく勝負に負けてしまったのはまた別のお話。

第20話 そうだ、海行こう 2日目（後書き）

海の本編です。ビーチボールしたお話です。ちょっと内容がよく分からない感じでしたね。

次回、第21話「そうだ、海行こう 3日目」

こなた「これは、ココの職員さんから聞いた話なんだよね……。みんな「ヒイヒイヒイ！」」

第21話 そうだ、海行こう 3日目

こなた「これは、ココの職員さんに聞いた話なんだけどね・・・。」

ほんの少し前、ココから100m程先に墓地があるらしいんだよ。

その人はね、その日知り合いの宴会のためにココの宴会場の係をしていたんだって。

それで、宴会ではしゃぐ人が多くてね。すぐにたくさん買い込んであったお酒が切れちゃったの。

いつもなら、もっと近くにひいきにしてるお店があったんだけどその日は店長の用事でお店が開いてなかったから別のお店に行ったらしいんだ。

その途中に例の墓地があつてね。そこは前から幽霊が出るって噂しててね。恐くなって早く通り向けようとしたの。

そしたら、墓地の中から声が聞こえたの。何事かと思ってその人は声の方に行ったの。

そしたらね、自分の職場の店長が・・・

こなた「墓地の中で大声で『セー。ームー。』を熱唱してたんだよ
おおお！！！！！！」

かいと「って、そんなオチかよ！！！！！！」
みんな「きゃああああ！！！！」

かいと「いや、『きゃああ！』じゃねーよ！どこが恐いんだよ！！！」

こなた「そこまで言うなら、かいと君も何か恐い話してよ。」
かいと「オレ？」

オレはしばらく考え込むとオレは『あ』と声を出し、答えた。

かいと「無い！！！！！」

かがみ「無いんかい！！！！！」

恐い話大会もこなたの話で切り上げ（こなたしか話してねーし）オレたちは明日のために早々に床についた。

かいと「オレだけ別室つてのも寂しいな・・・。」

まあ、オレは男子だし、他は女。一緒に寝るのもイヤだが。

かいと（やっぱ、寝付けねえ。）

一人が、寂しい、なんて。以前のオレじゃあ考えられない。そう思った。

かいと「明日も早く出るみてえだし、マジで寝るか。」

そう思い、オレは布団を頭に被った。

かいと「こんな、磯臭い場所で寝られるかああああああああああ！
！！！！！！」

初日の夜には気にならなかったことが二日目のオレの感覚神経に異常なほどに絡みついてきた。

第21話 そうだ、海行こう 3日目（後書き）

海編終了しました。結局、海と言っほど海じゃなかった。

次回、第22話「聖地は戦場」

かいと「オレはココで成さねばならぬ事がある！」

幕間 報告

倉場と彫られている墓石の前に立ち、手を合わせ軽く掃除をしてやる。

かいと「久しぶり。父さん、母さん。」

今日はお盆。オレは久しく来ていなかった墓参りに来ていた。

かいと「ずいぶん来てなかったけど、結構汚いな。」

オレは、墓石についたコケを手でぱと払い、「『倉場』の字に手を添えた。

かいと「父さん、母さん。オレ、変わったろ？見ててくれてたか？」

そう、オレは自分でも分かるほどに変わった。

人を寄せ付けない。寄せ付けなくなかった。親しい存在を持ちたくなかった。

けど、変わった。変わった。

こなた、かがみ、つかさ、みゆき。この4人から、オレの世界が広がった。

仲間ってこんなにも良いモンだつて。そう思えた。

何もできなかったオレじゃない。オレが守ればいい。今度こそ。

オレの世界を。オレの仲間たちを。友達を。

かいと「父さん、母さん。もう行く。アイツらとの約束があるから

な。
」

オレはスツと立ち上がり、そこを後にした。

幕間 報告（後書き）

かいと君の心境の変化、及び簡単な回想みたいな？

これからよろしく願います。

第22話 聖地は戦場

夏の重要な祭りとは。

コミケ。年2回の祭典。

この日のオレはいつもでは考えられないようなやる気が出ていた。

かいと「ふふふふふふふ。」

ていうか、端から見たらアブないヤツ。そんなオレがズン、ズンと歩いてくるモンだから道行くヤツらは途端にオレを見て道を空ける。

そんな感じで午前中は目的のサークルを回り、大半の気力を使い切り残りの気力で午後のサークルを見て回る。それがオレのやり方。

???「先輩じゃないですか。やっぱりいたんですね。」

この声は・・・。

かいと「こう か・・・。」

こう「うつす。」

やっぱりいた。いると思った。

こう「先輩、今朝ウチのところ来ましたね。」

かいと「まあー。」

やまと「先輩、だらけすぎです。」

かいと「あー、やまとか。」

やまともいた。何か疲れた。それしか出てこねえ。

かいと「やまとお。こっち来い。」

やまと「？」

やまとは一瞬、怪訝な顔をし、すぐにこちらに来た。

かいと「オレ疲れたから、しばらく介抱してくれ。」

ココで、かいとの意識は途切れた。

第22話 聖地は戦場（後書き）

何かよく分からない感じで終わりました。
こつもやまとも久しぶりでした。

次回、第23話「始まりと新たな出会い」

かいと「お前の名前は・・・、
“しおん”。」

第23話 始まりと新たな出会い

この時期になっても夏休みの暑さはまだあるらしく、相変わらず陵桜学園は暑さのせいでもかなりだらけた雰囲気であった。

かいと「よう。」

こなた「かいと君、久しぶり。」

かがみ「ちーす。」

つかさ「おはよう。」

みゆき「お久しぶりです。」

今日から二学期。夏休みも昨日で終わり、再び学校へと顔を出す日々が始まるのであった。

校長「……、というわけで夏休みはこれといった大きな事件や事故もなく……。」

つたく、そんな話なんてやんなくてもいいのによお。なんて思えるくらいの校長のどーでもいい長話を聞かせれ、オレは大きくあくびをした。って、校長のヤツ、今度は自分の昔話なんて始めやがった。

そんな感じで、体育座りで長話を聞かされるほど辛いものはない、とか思いつつ集会は終わり教室へ戻ってホームルームを済まして、帰宅する。

かいと「じゃあ、オレはこっちだからな。また明日な。」
みんな「ばいばい。」

みんなと別れて自宅へと向かっている途中にあるものが目に入った。

子猫「みゃあ」

白い子猫。まだ生まれて間もないのだろう。かなり小さく足取りもおぼつかない様子だった。

かいと「・・・、パン食うか？」

オレは腹を満たすために持ってきたパンを少しちぎって持参していた牛乳パックを半分に切り、その中にパンを入れてみた。
そしたら、ものの1分くらいで間食した。

かいと「じゃあな。」

オレはそう言うと、スツと立ち上がり自宅へ向かう。
するとさっきの猫もついてくる。後ろを向くと止まる。

オレは仕方なく、子猫を連れて自宅マンションへと帰宅した。

とりあえず、エサを用意してやったらスゲー勢いでたいらげた。ど
んだけ大食漢なんだ。

かいと「飼うにしても、里親見つけるにしても名前とかいるよなあ・
・・・。」

タマ・・・、違うな。ポチ・・・、犬か。

ふと気になる名前が浮かんだ。何故か分からないけどコイツにぴったりの名前が・・・。

かいと「お前の名前は・・・、
“しおん”。」

オレのその答えに答えるかのように、子猫・しおんは、「みゃあ」と鳴いた。

第23話 始まりと新たな出会い（後書き）

かいと君の飼猫、しおん登場。結構重要な役割を果たしますよ。
しおんの大体の設定。

名前 しおん 性別 ♀ 年齢 生後6ヶ月ぐらい？

毛並み 白 大きさ かいとの手に収まるくらい

特徴 ちっさい。あと無邪気？

次回、第24話「悲しき結末」

こなた「とうとう来てしまった……。」「
かいと「休み明けテストが……。」「

第24話 悲しき結末

夏休みも明け、怖いものとは何だろう。夏バテ？生活リズム？いや……。それは……

こなた、かいと「休み明けテストだあああああ！！！」

休み明けテスト。休みボケ対策なのか何なのかは知らんが何故か無意味にある（作者の勝手な解釈）のである。

そして、夏休みの課題にまったく取り組んでいないものもいるわけ。

かいと「必要ねえよなあ。休み明けテストなんて。」

かがみ「いや、そうでもないとおんたら勉強しないでしょうが。」

こなた「悪いけど、そんなのあっても勉強しないよ？」

みゆき「……。」

つかさ「あ、あはは……。」「

まあ、実際今までそうだったし。勉強する必要も無かったからな。

かがみ「とにかく！あんた達も少しは勉強しなさい！」

かがみ、母さんか？口うるさいな！。

そんなかがみの忠告も聞かず、オレはネトゲに走っていた。

何でかって？捨てたからだよ。ていうかオレ勉強しなくてもいいし。

かいと「んお？黒井先生じゃねーか？」

しばらく、一緒にネトゲをしていたのでそのキャラもだいぶ見慣れてきた先生のキャラだった。

かいと「なにになに？」

ななこ『ネトゲばつかしとらんと勉強せえ。』

ひでえ！ていうか、ネトゲ内でそんなこと言われても説得力ねえ！！

かいと「『先生、今日は見逃してください』・・・っと。」

まあ、明日テストなのにな。今更って感じだが。

ななこ『冗談言つとらんとさっさとやれ』

くそ！まさかの命令口調！（最近、作者は『まさかの』ってよく使います。）

そうしてオレは泣く泣く机のノートや教科書に目を移したのだった。

テスト中・・・。

かいと（あー、やべ。全然分かんねー。もうどーでもいいや。数学以外は。）

そうしてオレは数学を捨てたのであった。

ちなみに今回オレは数学の補習を受けることになりました。
（当たり前だ。）

第24話 悲しき結末（後書き）

今回は休み明けテストのお話。久しぶりに更新できた。

今回は、「つかさ編・1」できないこと」

つかさ「わたし・・・、何でこんなに鈍くさいんだろう・・・。」

かいと「体育祭か・・・。」

つかさ編・1 できないこと

秋もだいぶ深まってきた。2学期のこの時期にはとある行事が行われる。

ある者は気分が高まり、ある者は悲しみに包まれる。うれしくも悲しき行事。

体育祭。そう、この時期に陵桜学園は体育祭をとり行うのであった。

そんな中に普段とは明らかに違う生徒が一人……。

こなた「よし、みんなー！！今日は張り切っていくよ！」

泉こなた。普段の性格からこんな学校行事にこんなテンションで取り組むのははつきり言っており得ない。

かいと「こなた。お前、何企んでるんだ？」

こなた「ん？何も？」

怪しい。絶対、何かを隠している。何もないのに応援団長に立候補するやつじゃないってことはみんな知ってる。

かがみ「何か、よからぬことでも考えてるんじゃないだらな……。

「みゆき、泉さんもこのような学校行事に積極的に参加してもらえなんてうれしいです。」

いやいやいやいや。疑わなすぎも良くねえ。

まあ、さつきから見てたら何となく読めた。

かいと「こなた。お前、それやりたかったただけだろ。」

こなたを見れば、どこぞの高校のセーラー服を着込み、頭に黄色いカチューシャ、そして『団長』と書かれた腕章を見ればすぐ分かる。

かいと「さては、各団の出し物に『ハ。ハ。ユカイ』でも踊る気か？」

こなた「大当たり!!」

やめる。一般の生徒及び観客が戸惑う。あとそれってどっかの高校でも結構やるらしいな。

かいと「まったく、さつそく1年のヤツら困らしてやがる……。」
つかさ「……………」

？　　そういえばつかさはさつきから何にも喋らないな。

かいと「つかさ、どうした？」

つかさ「あ、ううん。何でもないよ……。」

かいと「具合でも悪いのか？　だったら先生に……。」

つかさ「……。あ、あのね、かいと君。ちよつとだけお話……。いいかな？」

そのとき、オレはつかさの顔がいつもの元気な顔じゃないことに気がついた。

学園内、中庭。

そこでつかさはいつものような姿は見せず、どこか暗い雰囲気では
つり、ぼつりと話し出した。

つかさ「みんな、いいな……。」「

かいと「？ 何が？」「

つかさ「みんな何でもできるから。勉強も運動も。わたし、何もで
きない……。」「

かいと「つかさ……。」「

そうか、つかさはそのことで悩んでいたんだ。自分は何もできない
と。オレたちと差がありすぎる、と思っていたのだ。

かいと「つかさ……。あのな……。」「

パーン！と開催を知らせる花火が鳴った。

司会「ただいまより、陵桜学園体育祭を開催致します！……！」

その声を期に体育祭は開催された。

つかさ編・1 できないこと（後書き）

つかさ編 体育祭の話。これまた久しぶりに更新。
また遅れた？分を巻き返すつもりで。

次回、「つかさ編・2 できること」

つかさ「わたしにだって・・・。」
かいと「行け！つかさぁ！！！！！！」

つかさ編・2 できること

体育祭も何事もなく進められていて順調に見えた。
全体を見れば。

だが、そこらを見渡せばおそらく運動の苦手な生徒達は皆どこか憂鬱な面持ちだった。
それはつかさも同じで。

つかさ「……………」

最早、喋る気力も無いらしくずっと下を向き続けている。
ズボンはもう千切れんばかりに握られており、彼女の心情をよく表しているようだった。

何故かというそれは今までの彼女の実績からだった。

短距離走ではビリ、綱引きはこけて多くの生徒を巻き込む、など口悪く言えば……

女生徒「足手まとい。」

だった。クラスの女生徒が唐突に彼女に言い放った。

つかさ「ご、ごめん……な……さ……。」

最後はもう言葉になっていなかった。ぼろぼろとつかさの頬を大粒の涙がいくつも零れ、落ちていく。
オレはその女生徒に言った。

かいと「いくら何でも言いすぎだろ。つかさだって一生懸命やっているんだ。」

女生徒「でも、^レ実際成果が出てないわけでしょ？ だったら邪魔するも同じじゃない。」

オレはもう何を言っても無駄だと悟り、つかさを連れてさっさと入場門に向かった。

次は最後の種目。クラス対抗全員リレー。これで最後の得点が決まる。

かいと「つかさ、ベストを尽くせればそれで良いんだ。」

つかさ「う、うん。」

こなた「じゃあ、^レ行こうか！」

みゆき「はい！」

オレの手前のクラスのヤツがオレへとバトンを渡した。そしてオレ

は一瞬の間もなく次へ、つかさへ回すためにと走る。

そこで事件は起こった。

男生徒「この！」

不意をつかれ、そいつは反則ともいえる行為をけしかけてきた。足かけ。アイツはオレの足に自分の足を絡ませ、オレをこけさせた。

かいと「ッ！」

どうやら足をひねったようで、歩くたびに激痛が走る。それでもオレは走った。つかさへ繋げるために。

かいと「つかさ！」

つかさ「大丈夫、かいと君！？」

かいと「オレはいいから早く走れ！」

つかさはその一言ですべてを察したようでバトンをもって走り出した。

かいと「行け！つかさあー！！！」

抜いた。たった一人だけだけど。あのつかさが。初めて。

その後、オレたちのクラスは3着となるまづまづの結果で終わった。

かいと「やったな、つかさ。」

つかさ「うん！」

つかさ「かいと君は私のこといっつも助けてくれた」ね！今日も！」

オレたちはハイタッチをしてお互いの成果を喜んだ。

人間、やればできるモンだ。

つかさ編・2 できること（後書き）

つかさ編 終了。やりました。

親友が作者始めたそうで、『涼風かえで』というユーザー名です。

次回、第27話「修学旅行1日目　そっだ　奈良行こう」

かいと「来ました！奈良！」

第27話 修学旅行1日目 そうだ、奈良行こう

ここ陵桜学園では何故か3年生の2学期に修学旅行をするという微妙にミスマッチな感じだった。

受験でいそがしいだろーに。どーすんだ、と思う方は是非、この陵桜学園への入学は控えた方が良さだろう。

行き先は王道の奈良、京都という行程で進む。

かいと「でも、なんやかんやで一番楽しいのってバスの中じゃね？」

オレはトランプをみゆきの手札からとり、同じ数字のトランプを捨てる。ババ抜き。

みゆき「そうかもしれませんね。」

こなた「かがみんは残念だね、一緒に乗れなくて。」

そう言うところなちは後ろのバスに乗っているかがみの方を向いてにやりと笑った。

かいと「大丈夫か？つかさ。」

つかさ「うう……。」

バスに酔ったらしく、現在はオレの膝枕によって何とか具合は良いらしい。

……、ココで吐かれたらヤバイな。

ガイド「間もなく、鹿の糞公園に着きますのでみなさん、準備を
しててください。」

かいと「何！？その公園！？」

つてツツコンだので周りから注目を浴びてスツと縮こまる。

鹿の糞公園内・・・。

つかさ「ふふっ、カワイイ。」

つて、つかさ。どんどん囲まれてる……。ちょーヤバイ！ああ、
こけた！つかさこけた！！

つかさ「ベトベトする・・・。」

みゆき「大丈夫ですか？」

どうやら鹿の糞があるところに突っ込んでいったらしい。見るから
に汚い。

こなた「かがみん、ほれほれ。」

かがみ「喧嘩売ってんのか！？」

こなた、その手の冗談はかがみには危険・・・って殴られた。

みさお「お、鹿って可愛いんだな。」

あやの「みさちゃん、手出したら危ないよ？」

あ、久しぶりに登場したな、この2人。みさお、手出したらホント

に危ないぞ。

あやのもっと強く言ってやれ。

かいと「さて……。」

「……すまじい……！」

何故かこの鹿の糞公園での時間があり得ないくらいにある。ここで一体何をして過ごせと！？

店も土産屋くらいしかねーし！

公園で無駄な時間を過ごしたオレたちは早めの旅館へとチエックインしていた。

なかなか味のある旅館で、秋の紅葉もよく見える。

かいと「いやあ、これぞ『絶景』。つてヤツだな。」

「倉場！勝負だ！」

声がした方を向けばそこには白石がいてオレにビシッ！と指を指し、叫んでいる。

オレはそんなヤツの人差し指を反対側に曲げてそのまま押す。

白石「ぐわあああああああああ！！」

とりあえず手を合わせてお経を唱える。お経唱えたの久しぶりだ。

その夜、オレは相変わらず倒れたままの白石を床に放っておいてさっさと床についた。
メシには白石は行かなかった。オレが『具合が悪いらしい』って言うておいてやった。

明日は京都に行くらしいな。
そんなことを思い、オレの意識は途絶えた。

第27話 修学旅行1日目 そうだ、奈良行こう（後書き）

修学旅行1日目。白石ファンの方すいません。
次は京都です。

次回、第28話「修学旅行2日目 そうだ、京都行こう」

かいと「来たぜー、京都！」

番外編 本日八節分ナリ！（前書き）

本日は節分ということでの特別企画。
まったりした（？）節分の始まり始まり〜。

番外編 本日八節分ナリ！

某所（かいと宅）。

こなた「えー、本日は急遽、このような狭い場所に集まって頂き誠にありがとうございます。」

かいと「失礼なこと言ってないか？」

まあ、狭いことは認めるが。アパートだし。

こなた「みなさんに集まってもらったのは他でもなく、本日は現実世界で節分だと言うことを作者から

聞きまして、このような形で集合してもらいました。」

かがみ「現実世界とか言うな。」

つかさ「ていうか、何するの？」

みゆき「節分と言えば、豆まき、恵方巻やお化けなどが催されますが・・・。」

「お化け」

節分お化けとも。東京の浅草、京都の花街、大阪の北新地などでは、芸者（舞妓、芸妓）やホステスが、節分の前後に通常の芸妓衣装ではない、様々な扮装をする。これを「お化け」と呼ぶ（一説には当初は子供の様な格好をしたことから「お坊髪」と呼ばれ、それが「お化け」になったといわれている）。いつもと違う扮装をすれば、魔を追い払うことが出来る、と信じられたことから始まったもの「1」。かつては一般人、一般家庭でも行われていたが、お客への呼び物になるせいか、花街のみに残った。しかし近年は京都市内を中心に、一般市民の「お化け」も復活の兆しを見せている。

(Wikipediaより)

こなた「というわけで、早速恵方巻や豆まきの準備してもらったよ。」

かがみ「じゃあ、かいと君が鬼ね。」

かいと「オレ!?!」

まあ、女に豆をぶつけるのも気が引けるが・・・。

こなた「豆まき開始!」

その瞬間、こなたも、かがみも、つかさも、みゆきも、こつも、やまとも、ゆたかも、みなみも、ひよりも、パティも、みんなみんながオレに向かって豆を投げつけてくる。(全力投豆↑!?)

かいと「うお!」

みさお「おい! 倉場! 当たんなかったら豆まきの意味ねーだろ!」

かいと「いや、豆って地味に痛いんだよ!」

パティ「死ぬがいいネ!」

かいと「パティ、怖え!」

ゆたか「えーい!」

かいと「お前は味方してくれると思ってたのに!」

みゆき「いきますよ!」

かいと「ちょ! みゆき! 笑顔で投げんな! 何か怖い!」

かいと「って、ツツコミながらかわせるわけねえだろーがあああああああ！！！！！」

豆まきつて撒いた後、自分の年の数だけ食うんだ。オレは18歳だから18粒な。

落花生の場合って何を一粒って考えるんだろう。殻のまんま？それとも中のヤツ？

かいと「で、ハアハア・・・今年の、ゲホッ！・・・恵方は・・・グフッ！どっちだ・・・うえっ。」

それから20分間くらい豆まきが続き、オレは今にも死にそうな息づかいをしながら問うた。

みなみ「確か今年の恵方は西南西ですけど・・・。」

ひより「恵方を向いて食べればいいッスね？」

こう「うひょー、美味しそう。」

つかさ「美味しく作れてれば良いんだけどなあ。」

やまと「ごちそうさま。」

かいと「早！」

恵方巻って簡単に言えば太い巻きずし。大阪発端らしい。

かいと「さてと・・・お前ら、そろそろしめるぞ。」

みんな「みなさん、今年も楽しく元気にお過ごしください!!!」
「!!!」

番外編 本日八節分ナリ！（後書き）

今日が節分ということで節分ネタ。
みなさん、鬼ははらえましたかね？

次回もヨロシクです。

第28話 修学旅行2日目 そうだ 京都行こう

1日目、奈良を充分(?)に満喫した陵桜学園3年生一行は次なる目的地京都へと来ていた。

かいと「んゝ、高いな。」

清水寺。とりあえず、1日目は京都の名所を見て回るという行程なのでとりあえず最初はここに来た。

かがみ「『清水の舞台から飛び降りる気で』とか言うけどこれって飛び降りたら死んじゃうんじゃないの?もう、あとどうなってもいいやー、つて感じ?」

こなた「かがみん……。それはあまりに夢がない考えだよ……。」

「

確かに。それはあくまで心構え的な心境だろ……。

大仏がある某寺。

つかさ「おつきいね。」

こなた「ずっと前から気になってたんだけど大仏の頭のぶつぶつていくつあるのかな?みゆきさん、知ってる?」

みゆき「いえ、私も気になっていたんですけど……。」

かがみ「まさか、数えようとか言うんじゃないだろうな?」

かいと「かがみ、オレはそのまさかを言うんじゃないかと思うが……。」

???「ちようどいい！先にすべて数えられた方の勝利だ！」

また来た。白石のヤツも相変わらず懲りねえな。

こなた「いやいやいや、今回ばかりはそれは無理じゃない？」
かいと「オレもそう思う。」

実際、大仏の頭のぶつぶつっていくつあるんでしょう？

再び、京都のある程度の名所を見て回ったオレたちは今度もまた味のある旅館に来ていた。

みゆき「ココは、美容効果のある温泉があるみたいですよ。」

こなた「おゝ、いいねえ。」

かがみ「じゃあ、みんなで入ろうか。」

つかさ「わたし、温泉って久しぶりだな。」

かいと「……………」

なんだろな。この疎外感みたいなの。まあ、オレは美容とかそういうのは興味ないが。

かいと以外「じゃあ、また後で。」

かいと「ああ・・・。」

入り口の前で別れて、ぽつんと一人悲しく暖簾をくぐる。やべ、涙出てきた。

第28話 修学旅行2日目 そうだ 京都行こう（後書き）

ちよつと意味わかんね、って感じ。たまにこういうカオス空間が発生してしまう。

次回、第29話「修学旅行3日目 そうだ 京都行こう part 2」

こなた「本日は自由見学の日なのです！」

第29話 修学旅行3日目 そつだ 京都行こう part 2

本日は、京都にて2日目。ほとんどの名所やら何やらを見学し終えたオレたち陵桜学園一行は修学旅行3日目には丸一日自由時間を取るといふなんかホントは無計画なんじゃね？みたいなスケジュールだったが、これはこれで面白そうなので特に口出しはしなかった。

ななこ「ほんじゃまあ、充分安全に気をつけて陵桜学園の生徒であるという意識をしつかり持って行動 するように！集合はバスの前に4：30集合や！時間に遅れたら有り難い反省文書かせるからな！」

その言葉を合図に一同はワーッと散らばっていき、それぞれのグループで移動を開始する。

こなた「んじゃ、そろそろ行こうか？」

かいと「ていうか、どこ行くんだ？」

つかさ「知らないよ？」

かがみ「わたしも。」

みゆき「泉さんが計画を立ててくださると言っていたはずですが・

・。

こなた「あー。」

かがみ「『あー。』っておま。もしかして忘れてたのか？」

はあ。これだからこなたに任せるのはやめた方が良かったな。

かいと「とりあえず、近くに店が並んでるみたいだからそこ見ようぜ。」

『おみやげ通り』。

なんか町おこしのためのやらせ的な物を感じるな。なんだこのストリートなアピール。

そんなこと気にしてないのか、こなた、かがみ、つかさ、みゆきは店頭に並べられた品々を見ている。

そんで、売り物もこれはホントに売り出し物か？って思える物でどっちかっていうと詐欺じゃねーの？みたいに感じたのはオレの錯覚だろうか。

かいと「ていうかさ、オレたちあと7時間くらい時間あるけどどうすんだ？」

こなた「ん」。こくら辺のお店もだいぶ回っちゃったしねえ。」

かがみ「見るところも特にないわよ？」

やべ〜。どうするよ。3日目をまさかのここで打ち切らせちゃうのか。どうせ終わらせんならんか良い感じにまとめろ、作者。

ME・GA「人類は今こそ進化するときなのである。」

かいと「いや、それ全然良い感じにまとめられてねーし。あと出てくんな。」

こうして、3日目はぐだぐだな感じで終わり、修学旅行も終わったのであった。

かがみ「あっけねー！」

第29話 修学旅行3日目 そうだ、京都行こう part 2（後書き）

修学旅行。最後はかなりぐだぐだな感じで終わってしまった。結構
ネタが浮かびませんでした。すいません。

次回、第30話「開催、陵桜学園桜藤祭！ 前編」

かいと「文化祭か・・・。」

祝30話！

第30話 開催、陵桜学園桜藤祭！ 前編（前書き）

「……う……。何故？何故わたしの中に入ってくるの？」
「……ごめんなさい、こうするしかないの。」

そして少女は再び歩み始める。

第30話 開催、陵桜学園桜藤祭！ 前編

陵桜学園『桜藤祭』。実際は文化祭だがこの学園特有の呼び方なので仕方あるまい。

ココ陵桜学園はその『桜藤祭』の準備に追われているくらすが多々あり、当日。会場がまだ公開されていない早朝から準備をしているクラスも少なくなかった。

ガツンツツツツツ！！！！！！！！！！

こなた「あう！」

つかさ「こなちゃん、ごめん！」

こなた「い、椅子が刺さった・・・。」

かいと「おい！何遊んでんだよ！？つかさ、そこテープ張ったか！？」

つかさ「あ、まだだよお。」

みゆき「みなさん、あと五分です！」

かいと「こなた！ふざけてないでさっさと手伝え！」

かがみ「つかさ！テープ張るトコ、間違ってるんじゃないの？」

つかさ「ああ！」

みゆき「あと三分です！」

ゆたか「お姉ちゃん！！！」

みなみ「ウチのクラスのパソコンの様子がおかしいんですが・・・。」

「

ひより「泉先輩ならどうにかなると思って来たんすけど。」

パティ「Oh！ココもだいぶ追い込んでるネ！」

かいと「こなた！ゆたかの方はオレが何とかしといたからな！」

こなた「こうなったら、禁断の九尾の妖弧の封印を解いて多重影分身を！」

みゆき「あと一分です！」

かいと「やべ！」

そうして少しドタバタしたあと何とか準備はすべて終了し、みゆきへ返事を聞く。

みゆき「はい、ちょうど開始時間です。なんとか間に合いました。」

みんな「3！2！1！」

みんな「桜藤祭、開催……」
「……!!」

かいと「げふう!」

とある衝撃でオレは目が覚めた。そこには見覚えのない、いや見覚えはある天井がオレの目に映し出された。

かいと「そうか、確かオレは昨日ココに引越してきて……」

引越し? 変だな。オレはずっと前からココを知っている気がする。いや、きつと気のせいだ。今日は陵桜学園つてとこに転校する初日だから緊張して変な感じがするだけだ。

そして、オレは部屋の鍵を閉めその学校へと向かった。

かいと「私立陵桜学園……」

何故かこの学校にも見覚えのようなものがあつた。いや、きつと前の学校も似たような感じだったし、そこただぶるだけかもしれない。そう思い、オレは職員室へ向かったのだった。

ななこ「いやあ、まさか同じ日に2人も転校生が来るなんて教師史上初めてや。」

かいと「2人？」

ななこ「そつちにいるやる？」

そこには高校生にしては少々、あの、背の低い少女がいて窓の外を眺めていた。

かいと「あの、オレは“倉場かいと”っていうんだけどそつちは？」
やまと「・・・“永森やまと”」。

静かにそう告げた彼女はもうオレには興味の無いかのように顔を背け、また外へと視線を落とす。

その時、オレは緊張しているものかと思ひ深くは気にしなかった。

ななこ「まあ、ウチのクラスやし、そんなに悪いヤツはおらんと思
うから心配せんで良いからな。」

かいと、やまと「はあ・・・。」

いや、先生。いくら何でもそれは自分で自分を褒めているようなも
ので、まあいいや。

そして、オレと永森さんは先生の合図のもと、教室へと踏み出した
のであった。

第30話 開催、陵桜学園桜藤祭！ 前編（後書き）

桜藤祭編 第1話終了！P S 2の『陵桜学園桜藤祭』にあやかってみました。

久しぶりの長めの更新です。

次回 第31話「開催、陵桜学園桜藤祭！ 後編」

かいと「一体、何がしたいんだ!？」

やまと「あなたに言っても、何にもならないわ。」

第31話 開催、陵桜学園桜藤祭！ 後編（前書き）

「????」もう、会うことはできないの？」

「????」そうね、もしかしたら。彼が、気付いてくれるまでは。」

少女は一つの木の下に立っていた。

第31話 開催、陵桜学園桜藤祭！ 後編

3-Bを始め、多くの人と知り合って1日が経った。そんな日の放課後、オレたちは劇の練習のため体育館に集合していた。

みゆき「それでは、シーン51、アーチャー召還の儀式を始めます！スタンバイよろしく願いします！」

そう言つて、役者は、かがみさんのみステージに駆け上がり、スタンバイする。

かいと「照明さん！電気おとしてスポットライト当てて！」

オレはみゆきさんの補佐、及び足りない所のお手伝いを任せられた。人一倍仕事が多い気がするけど気にしない！気にしないことにした。

こなた「かいとくん、次は士郎の役やってくれるんでしょ？早くしないと！」

かいと「はい！」

なんか、重要な人物の配役が決まって無くてオレに回ってきた。大丈夫か、桜藤祭。

かがみさんのアーチャー召還の儀式のシーンも無事に終わり、オレとこなたさんの番がやってくる。

みゆき「シーン82、セイバーと士郎のキスシーン、スタンバイお願いします！」

き　　す　　し　　ー　　ん
？

いやいやいや、聞いてませんヨ？

いや、もう腹をくくろ。第一オレ、小学校の頃の将来の夢のところに『俳優』って書いたから。何を思って書いたんだあの頃のオレ。

そんなこんなで無事に（オレの貞操も無事だった）練習も終了。大體は通してまあ大丈夫だね、そうだね。みたいな感じでお開きになった。

やまと「やつと終わったのね。倉場君？」

かいと「あ、えと、永森・・・さん？」

彼女は今日、ほとんど姿を見せなかったし、話すこともできなかった人物。そこで、オレは聞いたかったことを彼女に告げた。

かいと「永森さん、2年の“八坂こう”って人、知らない？」

昼休み、彼女はオレに聞いてきた。今、オレたちのクラスにいる“永森やまと”は自分の親友だと。会って、一度話してみたいと。

やまと「こう、ね。知ってるわ。この子の親友。」

かいと「この子？君の親友だろう？」

やまと「そうね。」

かいと「彼女は君に会いたがってる。会ってやることはできるだろう？」

やまと「“できる”ならね。」

かいと「……分かった。今、電話で八坂を呼ぶから。」

そう言つてオレはケータイを取り出すが目では彼女をとらえている。彼女が逃げ出しても捕まえられるように。

かいと「……八坂？オレだ。倉場だ。今、学校で永森さんを見つけた。こっちに來れるか？」

こつ「やまとが……！？はい！すぐにいきます！」

そう告げた八坂は一方的に電話を切り、20分ほど待つと姿を現した。

こつ「やまと……。ホントに……やまとなんだよね？」

やまと「ええ。この体は、ね。意識自体はこの子の物じゃない。わたしはこの銀河を統括する“情報統合思念体”によって作られた対有機生命体コンタクト用ヒューマノイドインターフェイス。信じられないかもしれないけど、信じて。」

あれ。これどつかで見たことあるけど。どつかの憂鬱そうな女学生の話に出てきたような話だったんですけど。

やまと「しかし、わたしは途中で何者かによって宇宙船に細工をされ、事故になつてココに墜落した。そのとき、ちょうど巻き込まれたのがこの子。そしてこの“星桜の木”。」

その木の噂はオレも聞いていた。季節がまるつきり違つのに時折満開の桜を見せたり、夜中に光つたりするという不思議な木。

やまと「そして、わたしはこの子を助けるためにこのこの中に入つて、この子の体を治癒してあげた。でも、その膨大な力のせいで世

界に改変が起きてしまった。

繰り返しの時間。そしてその空間に混ざり込んだ異物。それが、倉場君。あなたよ。」

オレが？この世界の、異物？

やまと「思い出して。本当のあなたは、今もこの陵桜学園に在学中のはずよ。」

かいと「それじゃあ、オレはどうやって戻ればいいんだ!？」

やまと「わたしが元の姿に戻れば世界の改変は元に戻る。いつも通りのあなたの生活に戻る。」

その瞬間、永森さんは眩しい光に包まれてそこには以前とは雰囲気の違い、永森さんが立っていた。

やまと「こう……?」

こう「やまと……やまとお!?!」

そして2人は抱き合い、わんわんと泣き出した。そしてオレの体は淡い光に徐々に飲み込まれていく。

こう「やまと、やっぱり私にはやまとしかないよ……。」

やまと「こう……。」

こう「愛してる、やまと。」

やまと「わたしも、愛してる。こう……。」

ひより「ていうのはどうスかね？」

かいと「良いんじゃないか、ひより!!」

オレはそう言つてグツ!と親指を立てる。

こう「私は激しく拒否する。」

やまと「わたしも。」

以上。田村ひより、作。『こう×やまと（タイトル未定）』でした。
。

第31話 開催、陵桜学園桜藤祭！ 後編（後書き）

桜藤祭ネタ。オチはちょっと前から考えてた百合オチで。
個人的にはやまとが好きなんで、『こう×やまと』とかもアリかも
と思う。

次回、

第32話「無駄にならない日はない、毎日毎日が君たちの知識の宝
庫なのだ」

こなた「ついにやって来た、期末テストの日々が……。」
かがみ「前回と前フリが同じなのは気のせいか……？」

第32話 無駄にならない日はない、毎日毎日が君たちの知識の宝庫なのだ

こなた「社会がつまらなくなっただんじやない、自分がつまらない人間になってしまったんだ！」

また何かのマンガがゲームに感化されたのか？ってこれどっかの生徒会の出だしじゃねーか。

こなた「というわけでかいと君の家で急遽勉強会やろう。」

オレの家かい。まあ誰もいないから良いけど。

かがみ「じゃあ後でね。」

つかさ「お菓子持って行くよ。」

みゆき「それでは後ほど。」

かいと「ああ、また後でな。」

そんで別れた。面白みもくそもねー。（作者談）

ほどなくしてかいと宅にインターフォンが鳴り響く。

かいと「はい？」

こなた「やほ。」

かがみ「来たわよ。」

つかさ「こんにちは。」

みゆき「上がってもよろしいですか？」

ふふ、みゆき。お前達はオレが言う前に上がるだろ。聞く必要なんて無いさ。実際こなたは既に上がってる。

こなた「みゆきさーん、ココ分かんないんだけど。」

みゆき「えつと、そこは×をそこに代入してですね……。」

かいと「かがみ「ちよーつと待ったあ。」

こなた「つかさ、みゆき」？」

かいと「お前らさつきから聞いてばかりかよ！」

かがみ「特にこなた！あんたさつきから一問も解いてないでしょ！
つーか解こうとしてない！」

こなた「いーじゃん、わたしは一夜漬け得意だから。」

こなた。お前はテストを甘く見すぎてる。まあ、オレも一概には言えないけどな。

かいと「お前はやればできるんだからちゃんとやればいいのに。」

かがみ「はあ、かいと君。こなたには私達から何を言っても無駄よ。」

こなた「かがみ、よく分かってるね。」

えつへん「とばかりに胸を張る（貧乳）こなたは何故か偉そう。」

つかさ「こなちゃん、それ威張れることじゃないと思う。」

みゆき「あのー、そろそろ勉強しませんか？」

確かに。思えばもうPM7:00。

かいと「じゃあ、夕飯はオレが作ってやるよ。」

こなた「よろしく。」

かがみに『手伝うか？料理教えてやる。』って言ったら殴られた。しまった。チョーシ乗りました。

地味にテスト当日。くそ。今回は数学の範囲が広い。覚えてね！。

そして再び数学の補習を受けることになるが決して別のお話などではない。

第32話 無駄にならない日はない、毎日毎日が君たちの知識の宝庫なのだ（後

テストの話もなんやかんやで3回目くらい。
次は補修の話にしようと思った。

次回、第33話「数学考えたヤツ誰だよ」

かいと「数学考えたヤツ、マジ死ね。」
つかさ「死ね!？」

番外編 本日ハバレンタインナリ！（前書き）

本日はヴァレンタインというわけで特別企画。

また後で本編内でもヴァレンタインすると思うけど一足先に。

番外編 本日ハバレンタインナリ！

こなた「かゝいゝとくゝん。」

かいと「こなた 近い。」

こなたがどんどん迫ってきてるのでとりあえず背中を反ってみる。
こゝ腰がつ！

かがみ「こなた 近いから離れなさい。」

こなた「うい！」

つかさ「こなちゃん 今日はどうしたの？」

みゆき「何かありましたか？」

こなた「今日はバレンタインだよ。現実の世界では。」

現実世界とか言うな。まあ、2月14日だしバレンタインだ。ぎりぎりの投稿らしい。

こなた「というわけで！『ツンデレチョコ渡し大会』！」

なんじゃそら。ツンデレでチョコ渡すのか。

こなた「べ、別にあんたのためにわざわざ作ったとかそんなんじゃないからね！」

かいと「ああ、もう始まつてるんだ。」

こなた「かがみは素でいけるね。」

かがみ「だからツンデレじゃないっつもの。まあいいわ。はい、かいと君。」

素っ気なくチョコを渡すかがみ。もっと、こう・・・何か無いのか？

かがみ「なんか文句あるの？」

かいと「イエ、ナニモ」

早くも趣旨がずれているがもういいや。ツッコむのもめんどくさい。

つかさ「はい、かいと君。」

かいと「サンキュ、つかさ。」

みゆき「どうぞ、上手に作れていればいいんですが。」

かいと「気にすんなって。もらえるだけでもうれしいよ。」

まあ、2人はなんだかんだで料理は上手いしな。あとこなたも。

最近はい、作者もテスト期間なんかで顔出せないが、今日は思い切
って投稿したらしい。またテストの順位落ちるぞ。

ME・GA「ちなみに家族にもらったチョコは形が亀の形で食べづ
らかった。」

いきなり出てくるアフォには一発拳をたたき込んで殺った。
作者死亡のため今回はココまで。

番外編 本日ハバレンタインナリ！（後書き）

なんかわけ分かんないヴァレンタイン。

みさおが言ったらこんな感じかな。ヴァレンタインって。

次回もお楽しみに。

幕間 深淵（前書き）

自己紹介第2弾。

キャラブック風に書いた。

幕間 深淵

名前：倉場 かいと（くらば かいと）

キャラパラメーター

学力

運動

オタク

家事

胸 -

かいと's Birthday

4月26日 牡羊座

性別：♂ 出身地：埼玉県

血液型：B型 身長：174cm

髪の色：濃い青（そうじろっの髪の色のような感じ） 瞳の色：

スカイブルー

利き手：右利き

趣味：ゲーム、運動

好き：運動、ハンバーグ 嫌い：人参、人付き合い（今は大丈夫）

好きな色：黒

得意科目：体育 苦手科目：数学

家族構成：父、母（共に死去）、長男、？、？、しおん（ペット）

所属：私立陵桜学園高等部3年B組

特徴：恋愛感情に疎いイケてるフェイスのこんちくしょう。振り返ったアホ毛が特徴。（新規追加）数学、恋愛以外はパーフェクト人間。3年になるまであまり親しい友達はいなかった。過去のこととはあまり話したがらず、結構謎である。（いずれ本編で語られる）高校に行く前まで群馬の祖母の家で生活していた。

番外編 空色彼方

<かなた' S E Y E>

ふふ、こなた。しばらく会ってないけど、元気にしてるかしら。そう君は相変わらずだったわね。ゆたかちゃんも体調良かったみたい。

こなたは今日はお友達と遊ぶみたいね。

某公園。

こなた「お待たせ。」

かいと「遅い！」

かがみ「まったくもう。遅れるなら連絡しろっていつも言ってるのに！」

つかさ「まあまあ、2人とも落ち着いて。」

みゆき「じゃあ、行きましようか？」

あら？こなた達。男の子と一緒にね。こなたが男の子と一緒にいるなんて久しぶりに見たわ。

映画館。

かいと「こなた。とうとう始まるな。」

こなた「そうだね！『涼宮ハルヒの消失』！」

かがみ「へえ 今日だったんだ。ハルヒの映画。」

つかさ「ハルヒってこなちゃんがいとも見てるアレ？」

みゆき「確かライトノベルでありますよね。」

こなた「・・・。相変わらずコアなものを好きになって・・・。（別にハルヒを否定してる訳じゃないですよ？あくまであまり知らないかなたの視点です。ごめんなさい かなたファンの人ごめんなさい。）

でも、あの子。かいと君と言ったかしら？ホントに昔のそう君にそっくり。こなたが気に入るのも無理ないわね。

本当に、こなたには無理をさせてしまったわね。

私があんなに早く死んじゃったなんて。それでこなたに辛い思いをさせてしまっている。

自分で自分がいやになるわね。こんなことになってしまつて。

かなた「もし、あの子がこなたを守ってくれるなら・・・。」

かいと「こなたはオレが守るよ。」

かなた「え？」

かいと「これでいいか？」

こなた「いや、一回でいいから言われてみたかった！」

かいと「くそ、やっぱりコイツの罰ゲームはろくなものが無いな・・・。」

かがみ「乗ったのはかいと君なんだし仕方ないんじゃない？」

つかさ「いいな。私も言われてみたい。」

みゆき「ロマンチックで素敵ですね。」

かいと「いや、マジ勘弁。」

なんだ。でも、あの言葉が本当だとしたらお願いしたいわね。

かなた「こなたの事、守ってあげてね。」

かいと「ん？」

そう言った瞬間、彼はこちらを見た。まるで私の姿を見透かしたように。

見えるはずがない、そう思ったが私は彼に向かって微笑んだ。

かいと「ああ。」

彼の唇はそう動いた。

番外編 空色彼方（後書き）

こなた達の休日。ついでにかなたさんの話。

「かいと君には靈感はあるの？」とかは思わないでください。

第33話 数学考えたヤツ誰だよ（前書き）

前回までのあらすじ…

かいとは数学で補習を受けることになった。
こなた、つかさも同じだった。

第33話 数学考えたヤツ誰だよ

教師「こら、倉場。寝てたって何もならんぞー？」

と、丸めたプリントでぺしぺし叩かれて気がついた。
オレはそつと挙手をして言った。

かいと「先生、寝てました。」

直後に軽いゲンコツのプレゼントを貰い、机に突っ伏した。

かいと「こなた、つかさ。オレこのまま失神したフリするからシカトしてる。」

こなた「先生！かいと君が補修を逃げようとしてます！」

かいと「おいしいiiiiiiii！」

こなた「つかさ……………」

かいと「変なところでシカトすんなあああああ！！！」

オレは新たに出た課題を終えるのに20分くらいかった。

こなた「遅いね、かいと君。」

と、こなたがニマニマしながら言ってきた。

こなた「……………マジ殺してえ……………」

かがみ「まったく……………ズルしようとしたからよ？」
みゆき「感心しませんね。」

ナンデイルンデスカ？補修ウケタノハオレタチダケデスヨ？

つかさ「こなちゃんがね、誘ってくれたんだって。この後ヒマになるからって。」

いや、オレヒマじゃないんですケド。こなたのせいで出された宿題で忙しいんですケド。

こなた「いやあ、それはズルしようとしたかいと君の責任じゃん？」

ん……。まあ、うん。そうだ。オレが悪いや。

こなた「じゃあ、アキバいこっか！今日から新しいゲーム稼働だから！」

かいと「よし！行くか！」

2秒で乗った。我ながらなんてダメ人間なんだ。

この後みんなでゲーセン行きました。
楽しかったです。

かいと「あれ！？作文！？」

第33話 数学考えたヤツ誰だよ（後書き）

短めの更新です。テスト期間なので。

次回、第34話「バッドエンド」

かいと「13km・・・。」

みのる「勝負だ！倉場！」

特別編 お披露目

こなた「はぁーい！この小説をご愛読してくださっている皆様！」
かがみ「本日は、作者の思いつきにより。」

つかさ「かいと君の初登場です！」

みゆき「かいとさんもスタンバイOKです！」

こなた「じゃっじゃじゃーん！」

> i 4 5 5 6 — 6 2 3 <

かいと「ooooooooiiiiiii！」

かいと「何でセーラー服なんだよ！？」

かがみ「今さら！？」

みゆき「とてもきれいですよ？」

かいと「うれしくねえ！」

つかさ「読者のみなさんが見るのは初めてだよ？」

かいと「ものすごく犯罪チックだよ！」

特別編 お披露目（後書き）

かいと君初描き。

イメージと違ってたらごめんなさい。

第34話 バッドエンド

12月になるとめつきり冷え込み、布団から出るのもおっくうになるわけ。

持久走大会。

長い長い道を走り、そしてゴールを目指す。

試みは大変感動的だが、体力に自信のないものは非常に憂鬱になる。そんなインドア派の心境も知らず、倉場かいとはストレッチに余念がなかった。

???「やい！倉場！」

来た。こういうイベントの時にはたいがいヤツが来る。

みのる「今日こそはお前に勝って主役の座を奪ってみせる！」
かいと「がんばれ。」

ここんとかかなり突っかかってくるがいい加減終わりにしたいもんだ。

かいと「えー、男子13kmか・・・。」

いけるな。少々長いがこれくらいなら余裕だ。

まあ、あとはどうやって白石を諦めさせるか、だな。

教師「位置について！よい、ドン！」

おい、小学校じゃねーんだからよい、ドンはなしだろ。
って、スタートしてやがる！何！？オレが悪いの！？オレだけ違う
の！？

かいと「まあ、これくらいならふつうに走ってれば追い抜けるか。」

かいとは意外と運動馬鹿でした。

30分後。

男子の距離は長いため、途中には給水ポイントがありそこで少しばかり休憩を取っている者がほとんどだった。

かいと「流石に冬といえど熱くなってきたな……。」

ちょうど中間地点の6.5km地点であと6.5kmあるのだ。
正直めんどくさい。

だが。

あの白石の顔見てたら腹立ってきた。
オレは勝負事に負けんのはいやでしょうがない。

かいと「いっちょ、本気出すか。」

陵桜学園グラウンド。

実況「トップを走るのは……白石！白石みのるです！」
こなた「つかさ「あ、セバスチャン。」

かがみ、みゆき「セバスチャン？」

状況を知らない2人は首をかしげるばかりです。

みる「ふ。流石に追ってこないだ……。なにい！」

オレは猛ダッシュで白石を追い抜き、悠々とゴール。

実況「優勝は我らが期待の星、倉場！」

わー！と言う歓声に少々苛々しつつ、白石を見る。

みる「うう、やはり勝てなかった。」

やはりっておま。勝てないって分かってたんかい。

……。実況。お前3年生だろ？

第34話 バッドエンド（後書き）

持久走大会のお話。
因縁の白石ですた。

次回、第35話「生徒会するらき すた」

こつ「お願いします！。崎先輩！」
かいと「いや、オレ杉。じゃねーし。」

第35話 生徒会するらき すた

私立陵桜学園生徒会。

別に特別な方法で生徒会メンバーが選ばれるわけでもない。普通の選挙で決まる。

そんな生徒会のお話・・・。

こう「お願いします！。崎先輩！」

かいと「いや、オレ杉。じゃねーし。」

みのる「そうだ！彼は天下の倉場様だ！」

白石は先日 of 持久走でとうとう敗北を認めた。のはいいが、何か急にみのる『俺はあなた of 一番弟子になります！』

とか言つて付きまといてくるようになった。まあ、殴つて黙らせるが。（失神）

終業式も無事に終わった直後のお話だった。

こう「じつはですね、私つて生徒会 of 会計を担つてるんですけど他の生徒会 of メンバーがそろいもそろつて風邪ひいちゃったんですよ。それで一人でやるのも大変なんで先輩にお願いできたらなーと。」

かいと「それならはじめからそう言えよ・・・。」

こなた「いやいや、かいと君は結構杉崎君 of ポジションじゃない？」

本名出てる・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！

そういうわけでお手伝いを。

こう「今日は事務作業とかで終わりますから難しいことはないですよ。」

かいと「じゃあ、オレたちは何すればいいんだ？」

こう「ハンコと軽いサインとかをお願いします。」

かいと「ぺったんこか……。」

おれがそう独り言を言うともみんなが変な顔してオレから離れていった。

作業を初めて数十分……。

つかさ「生徒会ってこんなにのんびりしてるんだね。もっと大変かと思ってた。」

こう「まあ、大体のイベントは終わってますからね。特に必要なことはないんですよ。」

みゆき「でも、3学期はまた忙しくなるのでは？」

こう「まあ、卒業式の準備とかそう言うのですかね。」
かがみ「卒業か……。」

しばし、思い空気が流れる。

もう少して卒業だもんな……。

黙々と作業……。

こう「ありがとうございます！おかげで終わりました！」

その後数分くらいで作業は終わった。

かいと「腰痛いな・・・。」

こなた「パイプ椅子だからねえ。」

こうして冬休み前に腰を痛めるオレたちであった。

第35話 生徒会するらき すた（後書き）

『生徒会の・存』ネタ。

知らない人には分からないかも。

次回、第36話「クリーニング・ザ・ルーム」

かいと「今年ももうすぐ終わるし、部屋の掃除でもすつか。」

第36話 クリーニング・ザ・ルーム

かいと「さて・・・。」

冬休みに入り、今年も終わる頃になったので大掃除をすることに。

かいと「やっぱあんまり使わない部屋は汚いな。」

ココはあまり使わない物置でしばらく掃除をしていなかったため所々埃を被っていた。

しおん「みゃー。」

かいと「ああ、しおん。ココに来て食べるモンはねえぞ？」

なんかかんやでコイツを飼い始めて結構たったな。コイツの食い意地には驚かされるがな。

なーんてほのぼの思ってたらずッ！としおんはゴミだらけの部屋へ突っ込んでいった。

かいと「んごお！？」

考えてみれば、こういう埃っぽい場所にはハウスタストなんだってヤツがあるらしいけど猫には大丈夫なのか！？

かいと「しおん？　たく、アイツちっさいから見つけにくいんだよな。」

こなた「ちっさいって言わなかった？」

かいと「ああ、悪いこなた・・・って、うおお！？　こなた！？」

こなた「ちやおっす。」

かがみ「そうじゃなくて！勝手に入ったことまず謝るの！」

かがみも勝手に入ってきてますネ。

つかさ「おじゃまします」。

みゆき「失礼します。」

頼むからみんな勝手にオレの家に上がるのやめてくれ！

こなた「大掃除をするのに手間取っているであろつかいと君の救済に來たのだよ！」

ちよいやー。的なポーズをとってすぐご機嫌そうなこなた。

かいと「ああ。オレ、基本的に掃除とかできるから別に・・・。」

途端にみんなしよぼーんと。

ああ、何かこれ罪悪感感じますネ。

かいと「えっと、じゃあ、お願いできます力・・・？」

かいと以外「まかせて（ください）！」

数分で終わり、昼飯時に。

かいと「さてと。ちょうど昼だし、昼飯作ってやるよ。」

こなた「待ってました！ハンバーグお願い！」

つかさ「私もかいと君のハンバーグがいいな」。

かがみ「わ、私もハンバーグがいいかな。なんてね・・・。」

みゆき「かいとさんのハンバーグ、美味しかったです。」

く……。やっぱりコイツらそれが目的か。

先日、家庭科の調理実習の時、自主流ハンバーグを作ったときかなりコイツらに好評だった。

（家庭科、調理実習は合同）

かいと「分かった分かった。」

第36話 クリーニング・ザ・ルーム（後書き）

大掃除か？そんだけ。

次回、第37話「聖夜」

こなた「ハッピーセイントクリスマス！」

第37話 聖夜

12月に入り、寒さも大分厳しくなってきた頃に行われるイベントがあるがそれは分かるだろうか。

それは・・・。

こなた「ハッピーセインとクリスマス!!」

かいと「ハッピーニューイヤーとごっちゃんになってる!？」

(『涼宮ハルヒちゃんの憂鬱』参照)

かがみ「まあ、実際はあつてると言えばあつてるんだけどね。」

確かに。だがそんなこと言い始めたらパーティーはじまんない気がするからやめとく。

みゆき「それでは、今宵は聖なる夜になることを祝って。」

みんな「かんぱ・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・い!!!」

というようなノリで始まったクリパ。

つかさ「ケーキできたよ。」

そんな感じで出てきたつかさ&あやの作ショートケーキ。
人数が多いため、3、4段くらい積み重なっている。

みさお「おお、相変わらずあやのも柊妹も料理うめーな。」

あやの「そんなことないよ。ひーちゃんがほとんど作ってたから。」

つかさ「ううん、峰岸さんの方がずっとく上手かったよ。」

嗚呼、ボケとフォローがエンドレス。もう、2人とも上手いでいいじゃねーか。

ゆたか「先輩、ジュースのおかわりいりますか？」
かいと「おお、サンキュ。」

むう。ゆたかはゆつくりしてなくていいものなのか？

みなみ「先輩。料理のおかわり持ってきました。」
かいと「ああ、悪いな。」

・・・。なーんか悪い気がするな。何かこき使ってるみたいな。

こなた「いきなり、プレゼント交換大会！」

びつくりした。（地味に）いきなり大声あげるな。

こなた「ルールはカンタン。歌にあわせてプレゼント交換！」

なんということでしょう！実に王道かつひねりのないアイデアです！

こなた「→のナレーション失礼だネ。」

もっていけ！最後に笑っちゃうのは私のはず♪

こなた「さあさあ、どうかナ？」

オレが開けた中に入ってたのはマフラー。かなり丁寧に作られていて、手作りなのは一目瞭然だった。

あやの「あ。それ私のプレゼント。」

みさお「あやのも兄貴というヤツがありながら。」

あやの「別にそんな訳じゃあ・・・。」

こうして夜は更けていった……。

第37話 聖夜（後書き）

クリスマスです。なんやかんやで結構来てしまった。

次回、第38話「歌って踊っておーまいがっ！」

こなた「ある晴れた日のこと」

かがみ「さっそく危ない！」

かいと「もしも願い一つだけかなうなら」

第38話 歌って踊っておーまいがっ！

こなた「おいかけてね、つかまえてみてえ、大きな夢、夢、好きでしょ」

と、こなたが某高校のとある女生徒のポーズをとる。

歌いながら踊れるってどんだけハイスペックなんだよ。

かがみ「かいと君、次に歌入れてたでしょ？」

かいと「ああ。」

スツと息を吸い、はあつとそれを吐き出す。

オレが歌うのは……。

かいと「ミ・ミ・ミラクル ミクルンルン ミ・ミ・ミラクル

ミクルンルン……」

この曲歌い終わった後、みんなにかなり距離をとられたがどうしたんだろ？

まあ、年も暮れが近づいてきたんでこなたが『そつだ、忘年会しよう』ってな。

（回想）

こなた「そつだ、忘年会しよう。」
かがみ「お、いいわね。乗った！」

つかさ「いいね、忘年会。」
みゆき「楽しみです。」

（回想終了）

かいと「いや、二回も言う必要なくね？」
つかさ「何が？」
かいと「いや、何でも。」

二回言いました。何で2回言うの力ナ？何で2回言うの力ナ？

つーわけで、メンバーにいろんな曲（始めの部分だけ）歌って貰いました。（作者談）

こなた「世界の終わりで、生まれた光、今風の中」」（World
d o n d）
かがみ「愛し合う2人 幸せの空 隣どおし あなたとあたし さ
くらんぼ」」（さく。んぼ）
つかさ「朝 目が覚めて 真っ先に思い浮かぶ 君のこと」」（メ
。ト）
みゆき「Baby どうしたい？ 操縦 ハンドル ぎゅっと握っ
て もう スタンバイ」」（What・b o u o m y s o a
r？）
かいと「もっていきけ！最後に笑っちゃうのは、私のはず」
（もってけ！セーラー服）

第38話 歌って踊っておーまいがっ！（後書き）

カラオケ。

突発的に浮かんできました。最後はもってけでしめた。

次回、第39話「一年の終わりと始まり」

こなた「私は家でごろごろしてたかった。
かいと「まあ、顔合わせも兼ねてな。」

第39話 一年の終わりと始まり

某神社。

ココは柊家が管理していてこうして年末になると参拝客で非常にぎやかだ。

かいと「おっす。かがみ、つかさ」

かがみ「おゝす。」

つかさ「いらっしやゝい。」

特に予定もないのでオレはこうして参拝に来ていた。

普段見られない巫女さんの格好をしているかがみとつかさは・・・。

かいと「写真撮っていいか？」

かがみ「やっぱりそれか！」

当たり前だ。神に参拝するよりこっちの方が御利益ありそうだ。

つかさ「バチが当たっちゃうよぉ！」

かいと「知るか！オレは神様の類は信じてねえ！！」

かがみ「神社で言うセリフじゃない！」

かいと「でも、使徒は信じてる。」

一度で良いからオレもあんなヤツらと対面したいものだ。
まあ使徒はキリスト教か。

こなた「やつほ、かいと君。お参り終わったよ。」
かいと「へえ、こなたも来てたのか。」

実を言えば意外。だってコイツこんなところに来るようなやつじゃないしな。

こなた「一年のはじまりはやっぱりこんな感じで始めようって。かいと「へえ、感心だな。」

こなた「いや、おとーさんが。」
そうじろう「やあ！」

急に何かが引つかかる！

絶対この人、巫女服めあてだ！！まあ、オレもだけど。

つかさ「ねえ、おみくじする？」

こなた「お、いいね。やろう！今年こそはいいのを引いてやる！」

かいと「…大吉　そうじろう「…中吉　こなた「…凶

こなた「ぐすん……。」「

かいと「い、良いことあるさ！」

かがみ「凶引いた後に言われてもね……。」「

まあ、年明けつつーことでそれなりに出店も出ている。

かいと「腹減ったし、何か焼きそばでも食つかな。」

こなた「わたし綿あめ食べたい。」

かいと「買わないからな。」

こなた「けち！！」「

今月は家計が苦しいんだ！コミケもあつたしな！

やれやれ、もうすぐ3学期が始まっちゃうな。

ま！退屈しない日々になりそうだ！

第39話 一年の終わりと始まり（後書き）

年の暮れを描いた。

次回から3学期。

次回、第40話「気の持ちよう」

かいと「いや、じづはずじびねづが……。」
みゆき「とても微熱には見えませんが……。」

第40話 気を持ちよう

冬休みも明けて、とうとう3学期に入るこの時期であった。

かいと「おう、久しぶり……。」

こなた「ああ、かいと君ひさしぶ……って顔色悪ッ！」

かがみ「ちょ、めっちゃくちゃきつそうなんだけど……。」

かいと「いや、大丈夫。ちょっとびねづが……。」

つかさ「微熱でそこまで声枯れちゃうかな……？」

みゆき「微熱でないことは確かですね……。」

その間にかいとはふらふらと4人の元へ歩いてくる。

こなた「ちょ！ホントに休んでた方が良いじゃん！」

てなわけで、かいとは早退。

んで放課後。

こなた「かいとくん、生きてる？」

つかさ「こなちゃん、物騒なこと言わないで。」

かいと「返事がない、ただの屍のようだ」

かがみ「随分余裕あるわね……。」

みゆき「かいとさん、大丈夫ですか？」

かいと「まあ、なんどがだいじょうぶかな……（訳：まあ、なんとかが大丈夫かな……）。」

治ってない……。一同はそう思いました。

かいと「うあゝ、まあ声は治った。」

かがみ「さっきの声は・・・？」

みゆき「かいとさん、ゆつくり休んでいてください。おかゆ作りましょうか？」

こなた「あゝ、じゃあわたしも作る。」

つかさ「じゃあ、私も。」

サンキュー。良い友達を持ったな、オレ。

かがみ「じゃあ、私は掃除でもしてあげようか？」

かいと「んあ、頼む。」

かがみは料理しないのか。まあ、こんな何でない日に死にたくないがな。

オレは特にすることもない（動くなって言われた）のでTVでも見ます。

こなた「かいと君、できたよ。」

かいと「おお、待ってました。」

それでもって、こなたがいたずらに唐辛子やタバスコなどを入れていたがそれはまた別のお話。

第40話 気を持ちよう（後書き）

スランプ再来。なんだ？この駄文。

次回、第41話「鬼も福も心の中」

かいと「なんか覚えがあるなあ。デジャヴ？」
こなた「デジャヴじゃない？」

第41話 鬼も福も心の中

2月3日。

一般的には節分と呼ばれる日で、基本的には豆まきをしたりなどする。

その日、かいとはこなた家にいて、鬼の格好をしていた。

かいと「なーんか覚えがあるな、この格好。デジャヴか？」
こなた「デジャヴじゃない？」

決してデジャヴではない、とは言いつてもいいのであった。
というわけで、既に他のみなさんが豆を装備していたので。

かいと「なあ、せめて鬼はジャンケンで決めねえ？」

この際、そうじろうさんにやって貰うとか。

こなた「おとーさんはお仕事で忙しいらしいよ。」

読心術！？心を読まれた・・・。
だからといって集まっているのは女ばかり。豆を当てるのは気が引ける…ってこの考え前もしたな。

かいと「せめて豆まきはやめてくれ。」
かがみ「何いってんのよ？」
つかさ「豆まきが一番面白いのに。」
みゆき「醍醐味ですよ。」

がぐん…。みゆきは味方してくれると思ったのに。
って、みさお。豆投げるのやめる。ウザイ。

みさお「んだよ。せっかく準備したのによお。」

あやの「みさちゃん。泉ちゃんが掃除するのも大変なんだからちよ
つとやめて。」

あやの「あんたは天使だ！……ってやめさせた理由がそれですか。
他にやることあるだろ？恵方巻食ったり。

あ、それいいな。恵方巻食べよう。

こなた「恵方巻って恵方を向くんだよね？」

かがみ「そうね。」

こなた、みさお「……………恵方ってどっち？」

言うと思った。

今年の恵方は……………。まあ、いつか。適当にやるときゃいい
だろ。

第41話 鬼も福も心の中（後書き）

豆まき再来。

次回もそんな感じ。

次回、第42話「甘くて苦い」

こなた「かいと君、チョコあげる。」
かいと「前も貰った気が……。」

第42話 甘くて苦い

2月14日。

一般的にはバレンタインと呼ばれる日で、日本では女性が好きな男性にチョコを渡す風習がある。

まあ、最近は親しい友人やお世話になった人に差し上げるなど、見事にチョコ会社の陰謀に踊らされているわけである。

ここ陵桜学園もこの時期になると空気も色めきどつちかというところもない男は非常に居心地が悪い。だが、そんなモテない男達の心情も知ってか知らずか、いやどつちかというところ知らないんじゃないか。3年B組倉場かいとはその日もチョコを貰っていた。

女子生徒A「倉場くん、チョコ貰って〜。」

女子生徒B「私のも貰って〜。」

かいと「分かった分かった！順番にな！」

そんなことが午前中ずっと続き、ようやく平穏が訪れた昼休みであった。

イチゴミルクジュース ￥120 をすすりながら、かいとは溜息をつくのであった。

こなた「すすりながら溜息ついたら爆発するよ？」

かがみ「爆発て…。まあある意味爆発するけど。」

つかさ「二人で何を話してるの？」

みゆき「日本語の使い方についてですね。」

かいと「いや、そこは放っておいてやろうぜ。」

少し話がずれたので軌道修正。

かいと「にしても。このチョコどうにかなんねーかな。」

かいとの横にはでかでかと積まれたチョコの山があった。

みさお「どれだけの人から貰ったんだ・・・？」

あやの「多いね・・・。一学年分くらいあるんじゃない？」

いつそのこと白石にやるかな。アイツ貰えてないだろうし。

かがみ「まったく。これじゃあ私たちがあげなくても良いんじゃない？」

かいと「なんだよ、かがみ。冷たいなー、みんなくれたのに。」

1、2年のヤツらは朝に既に貰った。

ああ、ゆたかの渡し方可愛かったな。いつそのことオレじゃなくてみなみとそのシチュやってほしかった。（腐ルパワー）

昼飯を食ってたんじゃあ間に合わないのですその日の昼食はチョコになった。

うぶ……。流石に吐きそうなんだが……。

ちなみに3日はチョコ食が続きまして。

チョコの食べ過ぎで鼻血の大量出血により、かいとは病院に搬送されたとかされなかったとか。

第42話 甘くて苦い（後書き）

ヴァレンタイン第二弾。

最近みさおとあやのが出ますね。

次回、みゆき編・1「自己嫌悪」

みゆき「閉じこめられてしまいましたね・・・。」
かいと「何？この漫画みたいなシチュ。」

久々のキャラクター編です。

みゆき編・1 自己嫌悪

この時期になれば高校3年生は既に準備は万端でなければならぬことがある。

そう、受験だ。大学入試に向けて予習、復習に余念がない・・・状態でなくてはならない。

ハズなのだが・・・。

こなた「・・・そんでもって経験値がウマウマでさあ。」

かいと「そういえば昨日隠れレベル上げスポットが・・・。」

と。まあ若干2名は危機感も持たず、ネットゲにいそしんでいた。

ちなみに『らきすたオンライン N E X T』だ。（そんなものはありません）

かがみ「まったく、あんた達は・・・もう少し危機感つてものを持ちなさいよ・・・。」

つかさ「いいな、みんな頭よくて・・・。」

ちなみにつかさはみゆきに分からない問題を聞いている最中だった。

ふとかいとはあることに気付く。

かいと「みゆき。勉強疲れか？顔色悪いぞ？」

みゆき「ええ！？あ、そうですか？」

こなた「む。言われてみれば。」

確かにみゆきの顔色はいつになく悪い。注意してみないと分からないが少しだけ青い。

みゆき「そうですね。昨日遅くまで勉強していましたから。」
かがみ「勉強も大事だけど、たまには休んだ方がいいんじゃない？」
みゆき「はい。気をつけます。」
かいと「いや、謝られてもこっちが困るぞ・・・？」

しかし、その時みゆきの顔が少し暗くなったのをかいとは見逃さなかった。

放課後。

みゆき「申し訳ありません。この後歴史の資料を探してこないといけませんので今日はお先に帰って頂いて結構です。」
かいと「あ。じゃあオレも手伝うよ。多いから大変だろ？」
こなた「お。フラグ立てに行くんだね？」

こなた。みゆきは史上最高のフラグクラッシャーだ。立てられるはずがない。

つかさ「じゃあね。」

オレたちはそう言って二手に分かれた。

図書室。

本を探して、見つければ抜き出す。という作業が10分ほど続き、オレは遂に口を開いた。

かいと「みゆき、何か嫌なことでもあったのか？」
みゆき「え？」

かいと「今日のみゆきの顔。いつもと違って暗かったぞ？」

そう言うともみゆきはまた俯いてしまった。ミスった。

みゆき「かいとさんには全部分かってたんですね・・・。」

いや、全部じゃねーけど？

かいと「ま、お前が何か悩んでるんじゃないのって事ぐらいはな。」
みゆき「そうですか・・・。」

暫しの沈黙。

その沈黙は、とある音に遮られた。

男性教師「まったく、誰だ。鍵も閉めないで帰った図書委員は。」

ガラガラガラ　　ぴしゃっ！！　　ガチャリ！

かいと、みゆき「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

What?

そう、鍵がかけられたのだった。

みゆき編・1 自己嫌悪（後書き）

みゆきさんの中編。

何となく話の筋が読めないなーと自分でも思いました。

次回・みゆき編・2「憧れ」

みゆき「かいとさんは私にとって何でもできる『憧れ』でした。」
かいと「オレから見ればみゆきの方がよっぽど羨ましいよ。」

みゆき編・2 憧れ

何故、自分がこんな人なんだろうって思いました。
自分はもしかしたら必要とされていないんじゃないかと。

かいと「ああ。みゆきがどんどん自虐的に・・・。」

みゆき「私って本当はダメダメな人間だったんでしょか・・・。」
かいと「だ〜か〜ら！そういうの考えるのはやめ！今はココをどうやって出るかって事だよ！」

二人は歴史の資料を搜索中にある教師によって図書室の扉に鍵をかけられてしまった。

二人きりになったのを機にみゆきは思いのままを暴露してしまうが・・・。

かいと（手に負えん・・・・・・・・・・。）

とうとうみゆきは顔に手を当ててめそめそ泣き出してしまった。

かいと「とにかくココをどうにかしないとなあ。」

今、扉壊して出ればいいと思ったアホ共、一時間逆立ちの刑に処す。確かにオレの力があればこの扉を破壊できる。だが、ココで壊して面倒なことになったらどうする？弁償しろ、なんて言われたらどうするよ？死ぬわ。

どうしようもないのでオレはポスツとみゆきの横に座る。大分落着いたのかみゆきも泣きやんでいた。

かいと「まったく、みゆきは贅沢すぎだぞ。」

みゆき「ぐすん・・・、そうですね・・・？」

かいと「これ以上どんなヤツになりたいんだ？オレからすればみゆきは何でもできるパーフェクト人間だぞ？」

みゆき「・・・。私もかいとさんが羨ましいです。」

・・・？ オレ、そんなポジションだったの？

かいと「いやいやいやいや、いや？オレみゆきに羨ましがられるほどすごい人間じゃねーけど？」

みゆき「いえ、かいとさんはすごいです。私の『憧れ』です。」

ふうん。みゆきにもそういう感情があつたのか。いや馬鹿にしてるわけじゃねーけど。

かいと「まあ、オレもみゆきも他人になれる訳ねーしな。」

みゆき「そうですね・・・。」

かいと「それに、オレはそのまんまのみゆきでいいと思うぜ？人間、憧れの対象くらいはあると思うけど、実際に入れてみてもそういうのっていいもんじゃねーしな。それに一人一人違うから面白いわけだしさ。オレもそういうのでお前達と一緒にいるわけだし。」

そう、みんな同じなんて面白いわけがない。一人一人があるから面白いんだ。

かいと「だから気に病むことはねーだろ。それが『みゆき』なんだから。」

みゆき「・・・そうですね。『私』は『私』で『かいとさん』は『

かいとさん』ですね。」

そういつてみゆきはにっこりと笑った。

オレはパン！と手を叩き、窓をガラリと開けた。

かいと「みゆき！出るぞ！」

みゆき「ええ！？でもココ2階ですよ！？それに資料が・・・。

」

かいと「大丈夫だって！それに資料も明日の朝早くに取りに来ればいいんだって！」

オレはそういつてみゆきの腕をつかみ、抱いて（お姫様だっこ）外へ飛び出した。

みゆき編・2 憧れ（後書き）

みゆき編終了しました。

もうすぐ終わってしまいます。寂しい・・・。

特報！

次回より、遂に最終章突入！！

かいとの謎めいた過去とは？遂にかいとの過去が明かされる！

次回、最終章・1「血縁」

群馬の祖母が具合が悪くなったという報告を聞き、
急遽、祖母の家を訪ねることになった5人。

かいと「ばあちゃん！来たぞー！」

彼の不幸の連鎖は、まだ続いていた・・・。

最終章・1 血縁（前書き）

父さん…母さん…。

かいと「っ！」

○○○…○○○…。

かいと「誰だ…。誰なんだよ…。」

・ん。・おん。

しおん！…！…！

最終章・1 血縁

こなた「でも、良かったの？ いっしょに行つて。」

かいと「まあ受験も終わったし、オレ一人で大変だろうからさ。」

新幹線。

この度、かいとの祖母が具合を悪くし、一人暮らしのためかいとに世話を頼んだのだ。

そして、かいとがこの4人を連れて行くことになったのだ。

かがみ「確か群馬の方だったわよね。」

かいと「そうだな、この頃顔あわせてねえけどどうしてるかな。」

つかさ「一人暮らしなんだよね？」

かいと「まあな。」

みゆき「昔、かいとさんがお世話になっていたとか…。」

・・・重い雰囲気。

かいと「と、トランプ持ってきたんだけど、やるか！」

それからしばらくして。

『次は。。。駅（下車駅）へ。』

かいと「お、降りるぞ。」
みんな「はい。」

そこからバス、タクシーを乗り継ぎ何とか祖母宅へ。

ドアをノックし、祖母を呼ぶ。

かいと「おーい、ばあちゃん。来たぞー！」

???「はいはい、いらっしやうい、かいくん！」

みんな「かいくん？」

するとみるみるかいとの顔から色が引く。（効果音的にはサァーッと）

祖母「はいはい！かいくん、いらっしやい！あら？かいくんもこんなカワイイガールフレンドなんか作っちゃって隅に置けないわねえ！」

一同はこのときこう思った。

（テンション高いなー。）

しかし、そんなこと言えるはずもなく、この異常なテンションの老婆はべらべらと長話を続ける。

祖母「すみませんねえ。おばあちゃんの話が長くなっちゃって、お友達にも迷惑かけちゃったねえ。」

かがみ「あ、いえそんなことは……。」

かいと「ま、変わってなさそうで安心したけどね。」

そう言っただけかいとは苦笑をした。しかし、そこには友人であるこなた達にはない感情もあった。

かいと「とにかく、ばあちゃんは体悪いんだから寝とけて。他のことはオレがやるから。」

みゆき「私たちもお手伝いしますよ。」

こなた「よーし！じゃあわたしはご飯つくろー！！」

祖母「ふふふ、かいくんモテモテだねえ。」

かいと「？ モテモテか？」

祖母「……かいくん。お墓参り、行った？」

かいと「墓参り？ああ！じいちゃんのか！」

祖母「それもあるけど……。○○○のことは……。」

○○○。……？ 聞き取れない。

それに……。

○○○。

し

お

ん

？

かいと「っ！」

イタイ。

これ以上は、思い出せない。

オレはこなたのいるキッチンへ向かった。

翌日。

かいと「ん〜」。やっぱり朝はこついう天気じゃなくちゃあな。」

オレが窓の外を見て伸びをしているとばあちゃんが後ろから声をかけてきた。

祖母「かいくん、おはよう。今日はおばあちゃん特製のお味噌汁作ったよ?」

かいと「おいおい、寝てていいのに。無茶とかしないでくれよ?」

祖母「これでもまだまだ元気・・・ゲホゲホッ!」

かいと「おい!だから寝てていいって!」

祖母「そうだねえ、悪いけどお友達にもお料理出してあげて?」

オレはハイハイと返事をして祖母を寝室へと送って、朝食を食べる。相変わらず上手い。昔からばあちゃんの料理は美味しい。こなた達とは別の上手さがある。

かがみ、みゆきは起きてきたが相変わらずこなたとつかさは起きてこない。

みゆき「これ、かいとさんが作ったんですか?」

かいと「いや、これはばあちゃんが作ったんだ。」

かがみ「へえ、美味しいわね、これ。」

中々の好評だった。

ちなみにこなたやつかさにもウケた。

さらに翌日。

かいと「ふう。相変わらず大変だな、この作業は。」

オレは家の近くの菜園にて軽く手入れをしていた。
小さい頃手伝ったことがあるので覚えていたが実際に一人でやると
大変だ。

かいと「えと、今日はレタスとトマトが取れたからサラダ作って、
後は昨日の残りか。」

昨日の残りとは焼き魚だ、作りすぎた。

オレは取れた野菜をかごに入れて、家の中へ持って行った。

かいと「ふう、疲れたな……。ばあちゃん？ばあちゃん！！！」

そこには青ざめた顔の祖母が床に伏していた姿があった。

かいと「誰か！こなた！かがみ！つかさ！みゆき！」

オレは必死に叫んで、すぐに救急車を呼ぶために携帯電話のボタン
をプッシュした。

『手術中』と描かれたプレートが光り、オレはその近くに備え付け
てあった椅子に座った。

とてもじゃないが気が気ではなかった。

すると脳裏に不思議な声が流れた。

『覚えてる？』

かいと「え？」

しかし、それっきりその声は聞こえなくなった。

それから2時間。

医師が手術室から出てきた。

かいと「先生！どうでしたか！？」

しかし、医師はふるふると首を横に振った。

かいと「……え？」

それは『死』を意味する行為、ということが認識できなかった。

こなた「か、かいとくん……。」

つかさ「……あう……。」

かがみ「……。」

みゆき「あ、あの……。」

医師「言っていましたよ。孫が会いに来ると。ほんの数日前に――

時退院しましてね。家にいなければ孫を心配させてしまう」と。

しかし、オレが聞き取れたのはそこまでだった。

オレはその時2つの事によって心を捕らわれていた。
祖母が死んだこと。

そして、脳裏に流れる不思議な声。

『知ってるだろ？』

『この感じを。』

『オレが殺した。』

そうだ、オレが殺した。
祖母を。オレが。

『一人だけ？』

『オレが殺したのは一人だけ？』

『オレは人を殺した。何人も。違うか？』

何人も？

オレが殺してしまったのは
父さんと母さんと祖母と。

二人のしおん？

最終章・1 血縁（後書き）

かいとは、思い出した。

大事な記憶を。

無意識に、忘れようとしていた。

あの頃の記憶を。

しかし、それはまだ一部分の記憶。

大事な記憶は、まだ

明かされていない。

思い出されていない。

それを思い出すことは、彼にとって

幸福なことであるか、

それとも、不幸なことであるか。

それは、彼自身が、決めること。

最終章・2 「切欠」

それはとある出来事によって明かされる。

最終章・2 切欠（前書き）

「???」これで・・・。」

少女は少し笑みを浮かべると再び口を開いた。

「???」あなた達の・・・。」

しおん達の・・・。

最終章・2 切欠

かいと「はあ………。」

祖母が死んで、今日で4日が経った。
やる気が起きない。

祖母の葬式も済ませた。

しかし、まだ胸の中にモヤモヤとしたものがある。
あの声。

意味深な言葉。

オレが殺したのは、父さん、母さん、祖母。

そして、しおん。

しおん？

しおん。ウチの猫だ。生きてる。殺した訳じゃない。

二人のしおん？

かいと「ダメだ。学校行かないと。」

やはり、家にいてもモヤモヤとしたものがあるだけ。
大学も近い。

これ以上は休んでなんかいられない。

早くに目が覚めたために、学校にいる生徒はほとんどいない。
少し薄暗い廊下を歩きながら、オレは気を紛らわそうとできるだけ
外界に意識を向けた。

そこには、さらに違和感を誘う人物がいた。

黒いロングの髪をなびかせて、颯爽と歩く女生徒が。

ななこ「おう、倉場。早いな。」

かいと「先生、おはようございます。誰ですか？あの女子。」

ひかる「ああ、2日前に転校してきたヤツだな。」

ふゆき「確か“篠原 しおん”（しのはら しおん）さんでした
よね。」

まただ。

しおん。

そして、2日前。

それは、猫のしおんがいなくなった日と同じだった。

かいと「篠原……しおん……。」

ななこ「それより、倉場は大丈夫なんか？祖母さんも亡くなられた

ばっかりやる？」

しかし、その言葉はオレには聞こえていなかった。
ただ、彼女のことか心に突き刺さるような、そんな感じがした。
この感じ。それはあの時間こえた声と同じように響いていた。

教室。

彼女は、篠原はただ呆然と外を見つめていた。
そこは、オレには理解できない。いや、もしかしたら理解できるの
かもしれない何かがあるように思えた。

そして、彼女は立ち上がると。
オレのもとへやって来た。

しおん「倉場くん？少し、付き合ってもらえる？」

屋上。

そこは少し肌寒いくらいの風がふき、朝の匂いを感じさせる空気が
あった。

しおん「倉場くん、覚えてる？」
かいと「え？」

しおん「昔、3人で屋上で遊んでいた。」
かいと「3人・・・？」

オレにはその3人という言葉が妙に引つかかった。

オレの脳裏に響いた、

『2人のしおん』という言葉が。

しおん「忘れてる？・・・いや、思い出したくない、ということね。」

そして、彼女は少しずつオレに歩み寄る。

しおん「忘れていいはずがないの、これは。だってワタシはあの二人のために。」

しおん「あなたに、拾われたんだから。あの時、あの空き地で。」

それは、間違いなく、猫のしおんを指している言葉だと言ったことを察するのにさほど時間はかからなかった。

そして、彼女の唇は、オレの唇を捉えていた。

オレの意識は遠い遠い
記憶の彼方に
消えた。

最終章・2 切欠（後書き）

彼女はしおんに選ばれたしおん。
彼女が見せる記憶の深淵は。

果たしてどのようなものなのか。

それは、かいと自身が見るもの。

それが、果たしてかいとにどんな選択を与えるのかは。

誰も知らない・・・。

最終章・3「忘却」

彼は、あの時変わってしまった・・・。

最終章・3 忘却（前書き）

かいと「ここは・・・？」

たぐさんの人。

騒然とする場所。

中心にいるのは・・・。

かいと「オレ・・・？」

最終章・3 忘却

かいと「お父さん！お母さん！」

もうダメだ。

もう死ぬ。

見せないでくれ。こんな苦痛の記憶。

かいと「お父さん！お母さん！しおんが泣いちゃうよ！」

まだ しおん。

誰なんだ しおん。

かいと「お父さん！お母さん！」

そうだ しおんはそのまま父さんと母さんから離された。

しおん しおん。

そう しおんは。

倉場しおんと、
山宮しおん。

オレの妹と、

オレの友達だ。

< かいと（小） ’ s E Y E >

しおん（山）「かいとくん！病院行くよー！！」

オレは窓を開けて応答する。

かいと「うん！」

しおん（山）「元気だねえ、お父さんとお母さん死んじゃったのに・
・・。」
かいと「ん、まあ。確かに明るくしてられる状況じゃないけど、し
おん・・って妹の方がもっと辛いからオレがめそめそしても、
な。」

彼女は少し前にオレの家の隣に越してきた、山宮しおん。
オレと同級生で、妹と同じ名前のことからすぐに仲良くなった。
何をするのも一緒だった。オレと妹としおんと、3人で。

病院。

しおん（山）「やつほー！しおんちゃん！」

しおん（倉）「あ、山宮さん、こんにちは。」

そう言つてしおん（倉）は、ぺこりとお辞儀をする。

我が妹ながら礼儀正しいな。

妹のしおんは、もうだいぶ前から体が悪くて病院は入退院をくり返している。

そしてほんの一週間前に入院したばかりだった。

かいと「まあ、今回はだいぶ調子もいいみたいだしすぐに退院できるかもな。」

しおん（倉）「う、うん・・・早くできるといいなあ」

うむ、医者に聞いたけど今までみたいに特に異常は見られないし、すぐに家に帰れるな。

かいと「・・・っと。じゃあ、オレは一端、家にもどつてお前の着替えとか持ってくるからしばらく待つてな。」

しおん（山）「待った！女の子の下着あさるなんて何事か！」

しおん（倉）「し、下・・・。」

・・・うん、そうだな。すっごい同感だ。変態っぽい。
と、いうわけで山宮はオレと一緒に着替えを取りに行くことになった。

この時、オレが止めていれば・・・。

かいと「にしても。山宮はいつもその帽子被ってるなあ。」

しおん（山）「やだなあ。これはかいと君がくれた帽子でしょ？」

そうだ。これは確かオレがこいつの誕生日にあげたものだった。

その時、勢いよく風がおき、帽子は道路の反対側に飛ばされた。

しおん（山）「あー！」

かいと「まあまあ、オレが取ってきてやるから。」

そう言って、オレは道路を横切って反対側へと駆けていった。

かいと「よし、どこも汚れてないな。」

オレは、山宮の帽子を拾い、軽く手で払う。

かいと「しおん。取れたぞ。」
しおん（山）「かいと君！車！」
かいと「・・・え？」

オレの目の前には、今まさにオレに突っ込んでくるトラックが映し出された。
オレの体が少し後ろに下がったと思ったその時、トラックはオレの目の前で停止した。

山宮しおんをはねて。

かいと「しおん！！」

返事は帰ってこない。
辺りは血で真っ赤に染まっていた。
しかし、それは幼いオレには理解のできない状況だった。
最愛の友人が、死ぬ。
それは、幼いオレにはあまりに残酷な現実だった。

しおん（山）「かい・・・と・・・君・・・？」
かいと「しおん！？」
しおん（山）「かいと君・・・私ね、かいと君のこと・・・好き・・・だ・・・よ？」
かいと「しおん・・・。」

しおん（山）「こんな時に・・・遅いかもだけど・・・でも、伝えておき・・・たかった・・・の。」

そう言つて、彼女はオレに笑いかけてくれた。

生きる価値のない、紛れもなく自分を殺したであろうオレに向かつて。

しおん（山）「しお・・・んちゃんと、元気で・・・やって、ね・・・？
かいと「しおん・・・？ダメだ！！しおん！死んじゃだめだ！！」

オレはしおんの手を必死に握るが、彼女はもう握りかえしてはくれなかった。

永遠に。

彼女の両親の所に詫びに行ったら、

しおん（山）の母「もういいのよ。始めからこうなってしまうことだったのよ？」

しおん（山）の父「ああ。しおんは君を助けて、そして君が生きている。それでいいんだ。」

オレには信じられなかった。

娘が死んだというのに、オレが殺したというのに何故こうもオレに
対して優しさを見せてくれるのか。

その後、オレは土下座をして詫びた。

しおんの両親は必死に止めていたがオレはやめなかった。

そして、先延ばしにしていた祖母の家への移住も決心した。

祖母はオレたちを笑顔で迎えてくれた。

でも、その笑顔もすぐに消えることになる。

看護婦「呼吸数、乱れています！」

医師「酸素マスク急げ！」

妹のしおんの病状が一気に悪化したのだ。

しおんが珍しく体調が良かったため、運動をしに公園へ行った後の
話だった。

祖母はオレが心配しないように、しきりに『大丈夫、大丈夫』と言
っていてくれたがオレにはそうは感じられなかった。

手術室のランプが消え、医師は浮かない顔をして出てきた。

かいと（ダメだったんだ……しおんも、きつと……。）

オレの予感はずっと当たっていた。

医師「残念ですが……。」

祖母は床に泣き崩れて、医師にかかえられて別の部屋へ連れて行かれた。

近くにいた看護師がオレの方を抱いてくれた気がした。でも、そんなものはなんの励ましにもならなかった。

そう、オレは、死神。

オレと関われば、いずれは死ぬ。

もう、たくさんだ。

最終章・3 忘却（後書き）

ついに本当の記憶を思い出したかいと。
しかし、それはあまりに悲しい過去。
それを知ったかいとは一体どうするか。
贖罪か、はたまたは別の何かか。

最終章・4 「報い」

かいと「オレの命は、もうオレのものじゃなかったんだ。」

最終章・4 報い（前書き）

オレは本当の記憶を思い出した。
悠々と生きて、
オレが殺した人々のことも知らずに。

最終章・4 報い

しおん（篠）「……………ふう。どう？思い出した？」
かいと「ああ、全部。」

オレはしばらくしおんの瞳を見つめた。
2人とも、こんな綺麗な眼をしてた。
輝いて、未来を生きるような。オレが触れていいはずがなかった、
綺麗な瞳。

ななこ「くおら！！！！！」

ふと、入り口を見ると黒井先生がこちらを見て怒鳴っている。

ななこ「不純異性交遊は許さんでえ！！！」

なるほど。端から見ればそう見えたらしい。
オレは笑顔を向けて否定した。

かいと「やだなあ、先生。そんなんじゃないですよ。」

しおん（篠）「……………」

ななこ「ま、何にしてもこのことはウチが目つぶっとくから、次からは気をつけるんやで！」

かいと「はい……………」

そして、オレは微笑を浮かべ、先生にゆっくり近づく。

かいと「あと、これからオレがやることも目をつぶっていてほしいんですけど……。」
「
ななこ「え……。」

ドサッ

オレは、先生の腹部に拳を入れ、先生は地に伏した。

かいと「やらなきゃいけないことが、できたので。」

オレは、そのまま屋上を後にした。

>篠原しおん's EYE<

しおん（篠）「行っちゃった。」

もう、私ができるのはここまでね。

あとは、あの人が何をしても私は止められない。

しおん（篠）「さよなら、かいとさん。」

少女は、霧のように消えた。

>かいと、S EYE<

オレは、静かに目的の場所へ行くために足を動かしていた。
オレがやらなきゃいけないことは・・・。

????「倉場先輩!」

ふいに腕を後ろに引つ張られて、オレは後ろを振り向く。

かいと「やまと、か。」

やまと「先輩。先輩の学校過ぎてますよ?」

かいと「ああ。いいんだ、行かなきゃいけないところがあるから。」

やまと「・・・?」

かいと「ああ、そうだ。みんなに伝えておきたいことがあったんだ。
言っておいてくれないか?」

やまと「何を・・・?」

オレは笑顔を作り、そして言った。

かいと「『今までありがとう。世話になった。』って、それじゃあ
な。」

やまと「ちよつと!先輩!?!」

オレはやまとの制止を無視して目的の場所へ向かった。

かいと「今行くよ。しおん。」

イマ 逝クヨ。シオン。
マツテイテ。スグニ会イニ逝ク。
ダカラ、マツテイテ。

かいと「しおん。お待たせ。」

マツテイテ、クレタヨナ？
会イニ、キタヨ？

かいと「オレ、もう疲れたよ。」

モウ、イイヨナ？
眠ッテモ、イイヨナ？
コレデ、イインダヨナ？

かいと「一緒に、眠らせてくれ・・・。」

こなた、かがみ、つかさ、みゆき、みさお、あやの、こう、やまと、
ゆたか、みなみ、ひより、パティ、黒井先生、桜庭先生、天原先生、
そうじろうさん、ゆいさん、みきさん、ただおさん、いのりさん、

まつりさん ゆかりさん ほのかさん。

サヨナラ。

一緒ニイレテ 楽シカッタデス。

オレが 生きていていいはずがないんだ。

彼の手の中には 青酸カリが握られていた。

最終章・4 報い（後書き）

彼が行き着いた答え。

それは、己の死。

しかし、その選択は正しかったのか。

はたまたは、間違っていたのか。

彼自身が行き着いた贖罪は、

誰の幸福になるのか・・・。

最終章・5 「救い」

こなた「かいと君のバカ！かいと君が死んじやったら意味が無いよ！」

最終章・5 救い

>こなた' S EYE<

こう「先輩!!」

こなた「ん？八坂さん、どったの？」

八坂さんは私達の目の前まで来て肩で息をしながら、口を開いた。

こう「倉場先輩から・・・メールとか、来てませんか？」

かがみ「メール？」

こう「今朝、やまと・・・っていうか私の友達が倉場先輩に会ったらしいんですけど、なんか様子が変わって。」

つかさ「どう変わったの？」

こう「それが、『今まで楽しかった。ありがとう』って・・・。」
みゆき「なんだか、お別れの言葉みたいですねえ・・・。」

まさか!!

こなた「かがみ！先生に警察に連絡するように言って！」

かがみ「はあ？」

こなた「私、かいと君のお婆さんの日記を読んだの！そしたら・・・。」

かがみ「嘘・・・でしょ・・・？」

つかさ「かいと君、そんなことがあったんだ・・・。」
みゆき「私たち・・・何も知らずに・・・。」

アレが本当なら、きっとかいと君は・・・。

私は、意志より先に、体が動いていた。

<かいと's EYE>

かいと「しおん、覚えてるか？前に3人で笑いあったこと。」

毎日、他愛もないことを話し合って一緒に帰った。

その日常を、オレが壊した。

父さんと母さんを殺し、

しおん達を殺して、

祖母を殺して、

もう、たくさんだ。

みんなが悲しむ。なんて、嘘。

オレはいない方がいい人間。

ひっそりと、ここで死にたい。

かいと「もう……。終わりにしてもいいよな？」

かいと『え？』

かいと君！

かいと君！

かいと君！

かいと君！

かいとさん！

かいと『みんな・・・？』

何故・・・。

何故、もう一度オレの名前を呼んでくれるんだ・・・？

こんな、オレを。

もう一度。

帰りたい。

でも、帰れない。

ゴメンナサイ。

こなた「かいと君!!!!!!!!!!」

その声は、もう一度、オレの心の奥深くに突き刺さる声だった。

息を切らして、オレの服を握るこなたの瞳は……。

かいと「同じだ……。あの時と同じ。」
こなた「…………え？」

かいと「オレが触れてはいけない瞳だ。」

オレは もう一度、瓶を握る手に力をこめる。

しかし、それはこなたの手によって阻まれる。

こなた「かいと君のバカ！かいと君が死んじゃったら、意味が無いよ！」

かいと「意味……？」

なんで…………。

なんで、こなたはオレなんかのために…………。

こなた「かいと君は一人じゃないよ」。
「かいと「え？」」

こなた「かがみがいる。つかさがいる。みゆきさんがいる。」

こなた「私がいる。」

こなた「みんな、かいと君の味方だよ。」

かいと「なんで？なんで？こなたはおれなんかのために・・・？」

こなた「好きだから。」

かいと「好き？」

こなた「かいと君と知り合っていくうちにね、思ったの。」

何かを隠しているんじゃないか。

自分たちには言えない何かがあるんじゃないか。

自分がどうにかしてあげられないか。

こなた「そう思ってたらね、いつの間にか好きになってたんだ。か
いと君のこと。」

オレは、とんでもないことをしようとしてたんじゃないか。

オレのことを必要としてくれる人がいる。

オレのことを好いてくれる人がいる。

かいと「こなた。」
こなた「何？」

かいと「もう一度、行っていいか？」

思い出の場所。

陵桜学園に。

こなた「もちろん。」

今日は、オレたちの思い出の日。

卒業式だった。

最終章・5 救い（後書き）

彼は、感謝した。

世界に、そして友人に。恩師に。

彼の世界は、まだ彼を認めていない。

しかし、友人は彼を認める。

世界へ残ることを。

次回、

最終話・「幸せに感謝を」

かいと「オレに、幸せをありがとう!」

最終話・幸せに感謝を

こなた「かいと君。」

かいと「何？」

すっかり太陽も真上に移動し、桜の花びらの散る道をオレ達は歩いていた。

こなた「やっぱり、かいと君は生きなくっちゃ。」

かいと「あははっ。何だよ、それ。」

こなた「だって、かいと君は“命”を託されたから。」

石段の上にピヨンと飛び乗り、バランスを取って歩くこなたを見た。

こなた「妹のしおんちゃん。それにお友達のしおんちゃん。」

かいと「“命”ね。託されたって言うのは違うな……。」

こなた「でも、二人とも最後は笑ってくれたんだよね？」

ああ、二人は、

こんなオレに笑いかけてくれた。

最後の最後まで。

こなた「お父さんが言ってたんだ。」

こなた「死ぬ前に、その人が自分に笑いかけてくれたらね。」

こなた「『自分の笑顔はあなたに預けます。だから精一杯笑って生きてください。』って。」

その言葉は、オレの心にまたしても突き刺さった。

まるで、今までのオレのモヤモヤを取り払ってくれるような、
すっきりした言葉だった。

こなた「あちゃー、やっぱり終わっちゃってるなあ。卒業式。
かいと「遅かったかぁ……。」

かがみ「遅すぎるわよ！まったく……。」
かいと「かがみ!？」

そこには、少し不機嫌な顔をしたかがみが仁王立ちしていた。
つかさ「心配しちゃった。」
かいと「つかさまで……。」

みゆき「大丈夫ですか？かいとさん」
かいと「みゆき……」

いや、それだけじゃない。

みんな、みんながオレを出迎えてくれた。

みさお「ったく、おせーぞ！倉場！」

あやの「大丈夫？ケガとか無い？」

こう「まったくもう。心配かけさせないでくださいよ。」

やまと「先輩、よかったです。」

ゆたか「良かった……先輩が無事で……。」

みなみ「お帰りなさい……先輩。」

ひより「いやあ、一事はどうなることかと思ったッスよ。」

パティ「コレで一件落着ネ！」

かいと「みんな……」

ななこ「つ倉場あ！ウチを殴るたあ、どういう事や！？」

ひかる「あとで、生徒指導室だな。」

ふゆき「まあまあ、お二人とも……。」

かいと「先生……」

そうじろう「むむ、うちの娘に心配かけさせるとは……。」

みき「倉場くん、気分はどう？」

ただお「心配したんだよ？」

ゆかり「どこにつてたのかな？」

かいと「う、まあえつと……大丈夫……です。」

かがみ「はい。こなたとかいと君の卒業証書。」
かいと「お、おう、サンキユ。」
こなた「かがみん、あり〜。」

オレの居場所はここにあつたんだ。
みんなの笑顔の中がとても暖かい。

こなた「ようし！最後はみんなで写真撮ろうか！！並んで並んで！！」

そつじろう「ようし、撮るぞ〜。」

かがみ「ほら、かいと君。笑って！」

つかさ「折角の記念写真なんだから」
みゆき「あ、ほら、撮りますよ。」

こなた「かいと君、笑お？」

かいと「ったく。」

言われなくても笑うよ。

みんなと一緒に、

この思い出の場所で取れる、

最後の思い出。

最高の笑顔で。

オレと 愉快的仲間たちと。

オレに 幸せをありがとう。

かいと「みんなと・・・もっと早くに会いたかったな・・・。」

）
F
i
n

ら
き
す
た
オ
レ
と
愉
快
な
仲
間
た
ち

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2472j/>

らき すた オレと愉快的な仲間たち

2010年10月9日11時08分発行